

千葉県中近世城跡研究調査報告書

第 9 集

—東金城跡・城山城跡発掘調査報告—

昭和 63 年度

千葉県中近世城跡研究調査報告書

第 9 集

とうがね しろやま
—東金城跡・城山城跡発掘調査報告—

昭和 63 年度

序 文

千葉県内には、数多くの中近世遺跡が所在し、それらにまつわる様々な史実・伝承も伝えられています。千葉県教育委員会では、それらを把握するため昭和45、46年度に中近世遺跡の分布調査を実施しました。その結果、県内586か所の所在を確認し、「千葉県中近世遺跡調査目録」として刊行しました。その中で、城館跡に関しては、文献史料による研究がかなり進められておりますが、規模・構造・性格等の実態調査はほとんど行われていないのが実情です。

そこで、千葉県教育委員会では、昭和55年度から第一次5か年計画、昭和60年度から第二次5か年計画で、中近世城館跡のうち重要性が高くかつ開発等の影響を受ける恐れがあるものを選び、その規模・構造等を把握し今後の保存及び活用を講じる資料を得る目的で、測量・確認調査を実施してきました。

今年度は、東金市東金城跡・千葉市城山城跡の2か所について調査を実施し、それらの主要部について、規模・構造等を明らかにすることができました。

このたび、発掘調査概報として刊行する運びとなりました。本報告書が学術的資料としてはもとより、文化財保護・活用のため広く一般の方々にも利用されることを期待しております。

終りに調査に当たり多大な御協力をいただいた千葉市、東金市両教育委員会をはじめ地元関係者の方々、調査を担当された財団法人千葉県文化財センターに対し、心から感謝の意を表します。

平成元年3月

千葉県教育庁文化課長

竹内 一雄

目 次

I 東金市東金城跡

1. 東金城跡の占地と地理的環境	1
2. 東金城跡の歴史的環境	3
3. 東金城の構造	7
4. 発掘調査	11
(1)調査方法と調査経過	11
(2)調査の概要	11
5. 結 語	18

II 千葉市城山城跡

1. 城山城跡の占地と地理的環境	19
2. 城山城跡の歴史的環境	21
3. 城山城の構造	26
4. 発掘調査	30
(1)調査方法と調査経過	30
(2)調査の概要	31
5. 結 語	39

挿 図 目 次

東金城跡

fig. I - 1 東金城跡周辺の地形 (迅速図)	fig. I - 4 土坑平面図・土層断面図
fig. I - 2 東金城跡周辺の主な中世城館跡	fig. I - 5 出土遺物実測図(1)
fig. I - 3 発掘区平面図・土層断面図	fig. I - 6 出土遺物実測図(2)

城山城跡

fig. II - 1 城山城跡周辺の地形 (迅速図)	fig. II - 7 調査風景
fig. II - 2 城山城跡周辺の主な中世城館跡	fig. II - 8 トレンチ配置図
fig. II - 3 城山城跡周辺の地形と小字名	fig. II - 9 柱穴列平面図・断面図
fig. II - 4 城山城跡地形測量図	fig. II - 10 サブトレンチ平面図・断面図
fig. II - 5 城山城跡概念図	fig. II - 11 出土遺物実測図(1)
fig. II - 6 調査風景	fig. II - 12 出土遺物実測図(2)

(fig. I・II-1 東金城跡・城山城跡内写真撮影方向)

図 表

tab. I - 1 かわらけ計測表…………… 14	tab. II - 1 鉄釘計測表…………… 38
tab. I - 2 銭貨計測表…………… 17	

図 版 目 次

東金城跡

PL. I - 1 航空写真	(6)尾根の(B)の平湯
PL. I - 2 (1)東金城跡遠景(南西から)	(7)尾根の(D)の段・平湯
(2)東金城跡遠景(北東から)	(8)尾根の(D)の塹堀
PL. I - 3 東金城跡・東金御殿跡絵図	PL. I - 5 (1)Aトレンチ北区
PL. I - 4 (1)I郭上の壇	(2)Aトレンチ南区
(2)II郭の上からI郭を望む	PL. I - 6 (1)Bトレンチ
(3)I郭斜面から腰曲輪を望む	(2)II郭から平野部を望む
(4)III・IV郭間の堀	PL. I - 7 出土遺物
(5)IV郭前面	

城山城跡

PL. I - 1 航空写真	PL. II - 4 (1)Aトレンチ1・2区
PL. II - 2 (1)城山城跡遠景(南から)	(2)Aトレンチ3～7区
(2)城山城跡遠景(北東から)	(3)Aトレンチ8～12区
(3)日枝神社正面	PL. II - 5 (1)S B01-3
(4)III郭南の腰曲輪	(2)S B02-3
(5)III・IV郭間の堀	(3)Cトレンチ拡張区
PL. II - 3 (1)III郭から腰曲輪(エ)方向	(4)Bトレンチ1～4区
(2)腰曲輪(エ)からIII郭方向	(5)Bトレンチサブトレンチ
(3)V郭からIV郭方向	PL. II - 6 (1)Bトレンチ4～5区
(4)V郭下の腰曲輪	(2)Cトレンチ1～4区
(5)I郭南端から北方向	(3)Cトレンチ5～10区
(6)空堀(A)	PL. II - 7 (1)E・Fトレンチ
(7)栄福寺正面	(2)Gトレンチ
(8)栄福寺境内から中世石塔類	PL. II - 8 出土遺物

付 図

- | | |
|--------------|---------------------|
| 1. 東金城跡地形測量図 | 3. 城山城跡発掘区平面図・土層断面図 |
| 2. 東金城跡概念図 | |

凡 例

1. 本書は、東金市台方1657番地他所在の東金城跡(遺跡コード213-004)及び千葉市大宮町1562-2他所在の城山(遺跡コード201-085)の確認調査報告書である。
2. 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助を受けて、調査を財団法人千葉県文化財センターに委託して実施したものである。
3. 調査は、東金城跡(調査面積100㎡)を昭和63年11月11日～11月15日、城山城跡(調査面積300㎡)を昭和63年11月16日～11月22日まで実施した。
4. 調査および整理作業・報告書作成作業に当たっては、財団法人千葉県文化財センター研究部長堀部昭夫、同部長補佐渡辺智信のもとに部長補佐兼班長西山太郎が担当したが、調査研究員井上哲朗の協力及び教示を得た。
5. 地形測量は井上哲朗作成の城縄張図を参考として、実施したものである。本書に使用した方位は、全て公共座標によるものである。
6. 東金城絵図は國學院大学図書館に所蔵されており、同館の許可を得て、撮影・掲載したものである。
7. 調査の実施に当たって、次の方々の御協力を得た。各々記して謝意を表します。(敬称略)
東金城跡 土地所有者藍文孝、小川幸三郎、本漸寺(坪井信美住職)、東金市教育委員会、日吉神社(高宮文吉宮司)、県立東金高校、千葉県立総南博物館、國學院大學図書館
城山城跡 土地所有者中島誠三、長谷部恒夫、長谷部巨多他。
8. 調査の実施及び本書をまとめるにあたり、下記の方々より種々の御教示、御高配をたまわった。各々記して謝意を表します。(敬称略)

関口廣次、山口直樹、遠山成一、外山信司、千葉城郭研究会

I 東金市東金城跡

1. 東金城跡の占地と地理的環境 (fig. I-1)

東金城跡は、房総半島付け根東側に位置する東金市市街地の背後、標高約70mの上総丘陵の突出部に占地する。また、北東真下に江戸初期に開削された八鶴湖、東方に九十九里平野を隔てて約9km先に太平洋を望む。幾筋も伸びる尾根は、西方では房総丘陵に連結し、北および東方では八鶴湖が存在する開析谷に接し、南側は急崖となっている。

当地域の山間部の上面は下総台地ほどではないが広い平坦面を形成している。また、北方向には徐々に高度を下げて下総台地に連なり、南西方向には徐々に高度を上げて房総丘陵へと連なる。下総台地の標高は全体的には30~40m、房総丘陵は300m前後であり、当地域はこれらの台地と丘陵の接点にあたり、複雑な地形を呈する一帯である。

東方から南方に広がる九十九里平野は隆起海岸平野であり、数列の低い砂丘列とその間の湿地帯から構成される。ここは縄文時代中期頃から海退が始まり、奈良・平安時代頃には現在の地形がほぼ形成され、現在も徐々に太平洋に向かって海岸線が前進している。

東金城跡はこのような丘陵地形の先端部を利用し、周囲を九十九里平野の低地、開析谷に囲まれた要害の地であったといえよう。

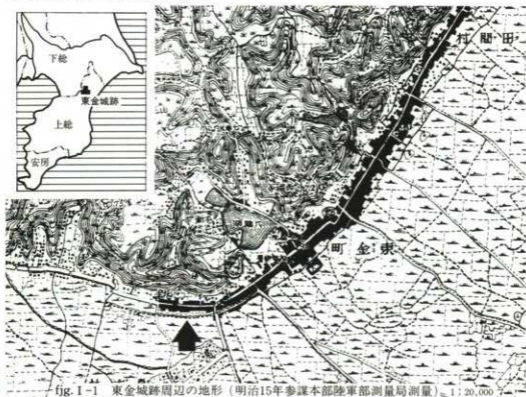


fig. I-1 東金城跡周辺の地形 (明治15年参謀本部陸軍部測量局測量) 1:20,000

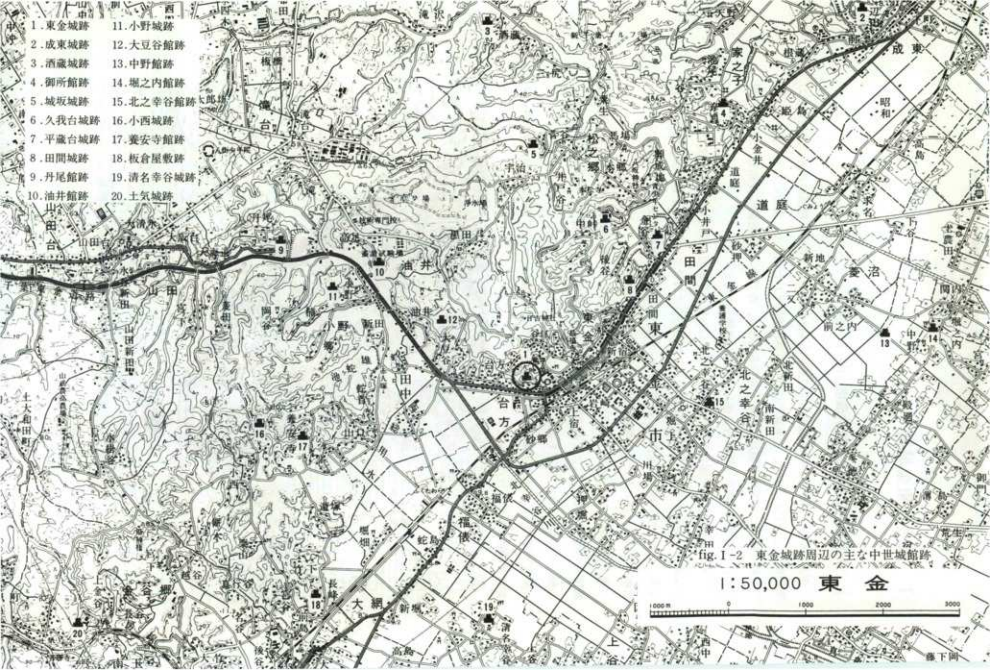


fig. I-2 東金城跡周辺の主な中世城館跡

2. 東金城跡の歴史的環境 (fig. I-2)

東金城跡は丘陵先端部に占地するが、それに連続する丘陵および周囲の台地平坦部、九十九里平野の砂丘列上に沿って、縄文から奈良・平安時代の遺跡が数多く所在する。また、平野部に面する丘陵斜面には東金城跡内を含め、多くの横穴墓が存在する。本城跡踏査の際にも新たな横穴墓を発見した。

東金城跡の北北東約2kmに存在する鎌倉幕府第6代執権北条長時居城と伝えられる久我台城跡¹⁾においては、1982年～85年まで房総導水路建設事業に伴って発掘調査が実施され、報告書が刊行されている²⁾。調査の結果、先土器時代石器群、縄文時代落とし穴・土壌、古墳時代後半から平安時代中頃の住居跡・掘立柱建物跡、溝、道路等、それらに伴う遺物が検出された。この中には、時期不明ながら多くの鉄滓が含まれる。また、中世の土壌群とそこから15～16世紀の常滑、瀬戸・美濃系陶器が多く出土し、当時、台地上が墓域であったことが推測される。しかし、城に伴うような遺溝は上部平坦面では検出されず、台地縁辺部の削り取り、および斜面部のテラス状整形にその可能性があるとのことである。

次に、中世の東金城および周辺の歴史的環境を主に文献史料から述べていきたいと思うが、残念ながら一次史料は極めて少なく、東金城および酒井氏の動向の概略を記した『土総國誌』(安川柳溪 1877)、『山武郡郷土史』(千葉県山武郡教育会 1916)、『千葉縣誌』巻下(1919)、『東金町誌』(志賀吾郷 1927)、『東金史話』(清水浦二郎 1959)、『日本城郭体系』第6巻(千葉・神奈川 1980)等は、近世に書かれたとみられるいわゆる軍記物の類によるところが大きい。列挙すると『土気城雙廢記』・『土気東金兩酒井記』・『土気古城再興傳來記』・『南總酒井傳記』(以上、『改訂房総叢書』第二輯所載)、『東金城明細記』・『東金記録』・『土気城主酒井氏系譜』(以上、『東金史話』所載)、『土気城主系図物語』・『土気東金兩酒井記改帳』・『酒井氏家系』・『酒井記』・『土気酒井記』(以上、東京大学史料編纂所所蔵)、『土気古城記』(国会国会図書館所蔵)、『土気城記』(国立公文書館所蔵)、『土気城主五代記』(穴倉文書)等である。これらには若干の相違、内容の濃淡はあるものの、基本的内容はほぼ同一である。なかでも『土気城雙廢記』は土気酒井氏家臣であったという板倉大蔵氏によるものであり、「雙」つまり土気城と東金城両城を指しながら、記述は主に土気酒井氏に関するものであること、他に比べて仏教説話的あるいは英雄的装飾性が少ないこと、『東金——』の類も土気酒井氏の動向を機軸として書かれていること等から、底本の可能性があると考えられる。以下、これらの概要を記してみたい。

酒井定隆は邊江に生まれ、一門と共に足利義尚に仕えたが、小知行なので関東へ武者修行に出て、15世紀半ばの永享・嘉吉の乱の時、鎌倉公方足利成氏に仕えたが、古河城落城により、以後、里見義豊に仕えることとなった。この時、品川(本光寺)から浜野(本行寺)への船中で暴風雨をおさめた日泰上人に信状し、「もし、武士の出世がかなったら、布施に領内残らず法

華宗に改宗する」との約束をした。里見氏にはその文武達者を認められ、上総・下総の境である中野村に置かれる。長享年中(1487~1489)に土気城から畠山氏を追い出した酒井越中守定隆(のち伯耆守)は、中野城から移り、長享2年(1488)、領内を法華宗(日蓮宗)に改宗させ(七里法華)、里見義豊から上総国の3分の2の知行を任せられる。永正6年(1509)または大永元年(1521)、定隆は87歳で隠居して清傳と号し、土気城を長子定治に譲り、第三子の備中守隆敏と共に田間城に移り、防衛上の理由で東金城に入城した。この時、松村(現在・松之郷)にあった本漸寺を法華宗に改めさせ、現在の位置に移し、酒井氏代々の菩提寺となった。なお、当初は千葉氏が東金に支城を置き、「鴉か峰城」或いは「鴉金城」と称し、後に東常緑の武将浜式部少輔春利が入った。応仁の乱で帰国した浜氏の跡には、千葉氏の属将山口主膳が入る。隆敏以降の城主は、大炊介敏治、備中守敏房、左衛門尉政辰と5代続く。敏治の時、酒井家宗家の争いが起こり、臼井城主原式部少輔の仲介で和解する。敏房の時には、永禄7年(1564)、武州岩槻城主太田美濃守が北条氏に攻撃され、里見家の救援として、両酒井氏は兵糧を送った。この年の第二次国府台合戦以後は、両酒井氏共、北条氏に属す。政辰の時、永禄年中には、本納城主黒熊大膳佐が里見方につき、土気城を攻めたが、これを退けた。天正18年(1590)、政辰は、小田原城に籠城していたが、同城落城後、浅野長政・石田光成ら豊臣秀吉方の軍勢に攻められ、殆ど無抵抗のまま落城した。なお、「東金城明細記」には、東金城諸士として、岩崎衆・岩谷衆・上宿衆・羽黒衆・油井衆・道庭衆・北之幸谷衆・東土川衆・渋川衆・宮十文字衆・福田原衆・家之子衆・南白亀衆・瀧澤衆・三ヶ尻衆・禰子屋衆・城下近所・表町分・大方衆(ほぼ現在の東金市域内)が並び、人名が付され、さらに諸士役人として、役名・石高・住居地等が挙げられているが、内容は明らかに近世的である。

なお、それぞれの記述の相違を若干あげてみると、酒井定隆の出自については遠江・京都・越後説、名前については定隆・貞隆説、家系については藤原氏系・新田氏系・足利氏系・上杉氏系、土岐氏系、千葉氏系等がある。

次に、確実な史料を入れながら、東金城をめぐる略史を述べていきたい。15世紀半ばまでの東金は、鎌倉の寺(浄光明寺・華藏寺・報国寺等)領が点在していた⁶⁾。享徳・康正年間(1452~57)に馬加城主馬加隆奥守康胤・臼井城主原胤房(古河公方)と千葉城主千葉胤直(扇谷・山内両上杉方)が争い、千葉城は落城し、東金も戦乱下に入った。遠山氏は、鎌倉府ゆかりの寺領の存在故に、この時の上杉方の攻撃目標とされたのではないかと推定している⁶⁾。なお、上杉氏は胤直の弟賢胤の子実胤・自胤を助けて千葉氏の再興を計り、一方、將軍足利義政の命を受けた千葉氏一族の美濃郡上城主東常緑が下総に下向し、馬加康胤を討し、当地域には常緑の武将浜式部少輔春利が入った⁷⁾。しかし、その後しばらくは不詳である。

さて、酒井定隆の動向であるが、まず、その出自について、川名登氏の説⁸⁾を紹介したい。鎌倉本興寺に残る永禄2年(1559)の棟札⁹⁾によると、文明13年(1481)、日泰は酒井清傳を大壇

那として、鎌倉に本興寺を再建している。これは清傳の子孫酒井中務丞胤治・嫡子小太郎政茂が再興した時のもので、住職は土氣善勝寺の日芸、そして祝儀を送った人に酒井左衛門佐胤敏・酒井大炊介信繼の名がある。これによると、この時点で清傳（「定隆」という名は実は不確実）の存在の確認および日泰上人との出会いが「物語」より早かったこと、さらに、胤敏・信繼の名が諸系図に全く無いこと等が指摘でき、軍記物・諸系図の類の信憑性が疑われる。そして、日泰上人との出会いと領内の法華宗改宗の約束および改宗令は、仏教説話の一種であろう。また、上総の三分の二を与えたという里見義豊は永正11年（1514）の生まれで、年代に矛盾があり、当時これ程の勢力を有していたか疑問であることから、原氏との関係も考えられるという説もある。川名氏は、浜野を本領とした土岐氏の一族が浜氏を称したが、その孫に治敏、その子に酒井定隆がおり（『古本土岐系図』）、治敏と浜春利は同訓ゆえ、同一人物の可能性をうただし、酒井姓は14～15世紀浄光明寺領の上総国山辺郡内境郷に由来するとした。境郷は『大日本地名辞書』では東金市丹尾辺に比定されているが、定隆が先ず本拠を構えたという中野村に隣接していることもそれを裏づけるものと考えている。

次に里見氏・北条氏との帰属の問題について触れたい。軍記物では、永禄7年の第二次国府台合戦後に北条氏に属したとされるが、既に大野太平氏⁹⁾が明らかにしているように事実はその逆であった。永禄8年と推定される2月18日付河田（豊前守、上杉謙信重臣）宛酒井中務丞胤治（土氣城主）書状¹⁰⁾に「去十二 氏政當城へ被取懸候…金谷口ノ同名左衛門尉（政辰）為手向指迎候間、愚息左衛門次郎人衆召連指迎逐一戦」げたが、「房州（里見氏）御手前折角故當城へ壹騎之合力無之候」、また、「我等事、年來氏康氏政前 無二走廻、去庚申年（永禄3年） 自御越山（上杉輝虎の関東出陣）之初、兩總拙者計令忠信候處、去年國府臺合戦之刻不忠之仁被致、立忠信之某難題共更不堪堪忍候間、眼前興亡令逼塞、房州へ一味、太美（太田美濃守）岩付へ送届申候」と記されている。つまり、土氣酒井氏は国府台合戦以前は北条氏に属していたが、疑いを懸けられて以後上杉・里見方につき、一方東金酒井氏は北条氏についていたようである。また、「房州御手前折角」については、同年と推定される6月27日付里見太郎（義弘）宛輝虎書状¹¹⁾に「正木左近大夫（時忠・勝浦城主）以逆心、正木大炊助（一宮城主）没落」という内容であること、また先の史料の傍証として「酒井中務丞無二相守御父子之前之由、見御書中候」とあり、義弘が輝虎に援助を求めたことがわかる。なお、永禄9年2月、輝虎の常陸小田城攻略後に関東の諸士に軍役を課した中に、「房州衆 五百騎、酒井中務丞 百騎」とある¹²⁾。この後、永禄12年の越前講和から元龜2年の甲相同盟まで、里見氏と上杉氏は一時的に離れるが、酒井氏の動向は不明である。天正初年推定の清水上野入道宛氏政書状¹³⁾には「去十九東金へ押詰、土氣東金両地郷村毎日悉打散候」と、北条に攻撃され、天正5年（1577）推定の2月28日付直江大和守（景綱・上杉家重臣）宛里見義弘書状¹⁴⁾に「両酒井も去年氏政一味候」とあり、天正4年以降土氣・東金両酒井共に北条に属したことがわかる。さらに天正末の

「北条家人数覚書」⁽¹⁴⁾、「関東八州諸城覚書」⁽¹⁵⁾には「とうかねの城 百五十騎」と記されている。土気城が三百騎であるからそのちょうど半分であり、数だけから推測すれば、土気酒井氏の支配領域の方が広いことが推測されるが、同覚書中の他氏と比べて少ない方である。これについて遠山氏は、酒井氏の北条領国中での相対的地位の低さがうかがえ、さらに東金城と田間城を曲輪・その他の施設で連続させて一大防御線を完成させたという説に対して、疑問を投じている⁽¹⁶⁾。ところで、永禄4年に推定される「関東幕注文」⁽¹⁷⁾には「酒井左衛門尉」(政辰)の名があり、実際は軍役に出たかは不明ながら、この時点で東金酒井氏は上杉方だった可能性がある。或いは両酒井氏は、当時期の多くの在地領主がせざるを得なかったように、残存史料が示す以上に時の情勢に合わせて帰属を変えていたことも考えられる。

さて、天正18年以降の東金城跡については、徳川家康が、慶長18年(1613)鷹狩りの為、現在の東金高校の地域に東金御殿を、また延寶3年(1675)には、板倉甲斐守重寛が麓に陣屋(現在の大多和医院敷地)を構築している。東金御殿は、酒井氏が当地域を領したという事実を継ぐという意味をもってその居館跡に建てられたのではないかとする考えもあるが、東金高校の敷地の造成による削平の為、不明である。

なお、東金城跡と他の城館跡との関係については、「3 東金城の構造」の最後に若干触れておきたい。

注(1) 『大日本地名辞書』 1903

(2) 『東金市久我台遺跡』(財)千葉県文化財センター 1988

(3) 「浄光明寺文書」・「光明寺文書」・「保坂文書」・「反町文書」等『千葉縣史料』中世篇 縣外文書 所収

(4) 06 遠山成一「東金酒井氏の居城-東金城について-中世城郭の史料化にあたっての前提」『中世城郭研究』2 1988

(5) 「鎌倉大草紙」『新校群書類従』巻382

(6) 川名登「房総の戦国武将・酒井氏の史実と伝説」『房総の郷土史』第3号 1975

(7) 『千葉縣史料』中世篇 縣外文書 313他

(8) 大野太平『房総里見氏の研究』 1933

(9) 「河田文書」米沢市伊佐早謙氏所蔵、『房総里見氏の研究』所載

00 「萩野文書」『房総里見氏の研究』所載

01 「浅間文書」『房総里見氏の研究』所載

02 「清水文書」『千葉縣史料』中世篇 縣外文書 314

03 「吉川文書」『千葉縣史料』中世篇 縣外文書 322

04 「毛利文書」『神奈川県史』資料編3 古代・中世(3下) 9769

05 「毛利文書」『神奈川県史』資料編3 古代・中世(3下) 9770, 9771

07 『千葉縣史料』中世篇 縣外文書 30

3. 東金城の構造 (付図1, 2)

東金城跡及び周辺の城館跡の構造についての記述は、清水浦二郎氏によるもの⁽¹⁾が、最初といえよう。また、同城の本格的な縄張りについては、1988年遠山成一氏が発表されたもの⁽²⁾が最初である。著名な城跡にも関わらず、これまで概念図が作成されなかったのは、その規模と天険な地形、そして、見通しのきかない山林の為であろう。本城は広大かつ天険な自然地形に非常に多くの施設を配しているため、その縄張りは一見無秩序に見えるが実に整理されたものである。その基本プランは、①丘陵最上部の幾つかの郭からなる主要部、②それを取り囲む腰曲輪、③東・北・西に伸びる数本の尾根頂部の整形、④尾根斜面の整形、⑤本漸寺境内・東金御殿跡(現在県立東金高校敷地)等の尾根に囲まれた地域に分けられる。なお、I・II郭は第二次大戦中に陸軍によって大幅な改変がなされているとのことであり、丘陵縁辺部には防空壕や哨舎の跡が多くみられる。

I郭

本城跡の占地する丘陵先端部の最高部(標高72~74m)かつ中心部に位置し、面積は約1,000㎡である。平坦部は四方の尾根へ若干突出しているため、その形状は不整多角形を呈し、特に東部はIII郭側へ方形に出桁形状に張り出す。II・III郭との比高は約6mである。また、南東端つまりII郭側にはこれまで未確認であった櫓台状の土壇が発見された。その北部は細くなり土塁状を呈している。この土壇のI郭平坦部との比高は1~1.5mである。今回の発掘調査では、I郭部分が削平された後、この櫓台状の土壇が版築状に造成されたことが確認された。本城の最高部に位置し、後述するように全体の遺構の配置がI郭を最終的に防衛する縄張構成であることから、I郭が本城の主郭であると考えられる。なお、現在目にする櫓台状の壇は、発掘調査によって、近年(恐らく第二次大戦中に)盛土されたものであることが判明した。

II郭

I郭の南西に位置する平坦な曲輪で、規模は長さ約90m、幅20m~40m、面積約2700㎡である。陸軍による改変は、南東端にコンクリート製のトーチカが設置されていること、平坦部が若干の削平を受けていることの外は、今回の調査では確認できなかった。しかし、縁辺部に土塁の存在した可能性は考えられる。なお、I郭直下には若干の窪みが巡り、発掘調査によって空堀の存在が確認された。これによってI郭の壇との補完関係とその防衛効果は倍増するものと考えられる。

III・IV郭

III郭はI郭の東側突出部の南東に張り出し、方形と北側に先すばみに回り込む三角形を組み合わせた形状である。IV郭は堀切を挟んでIII郭の南東に位置する不整形の郭である。堀底との比高はそれぞれ約4m、約3mで、III郭はIV郭より約1m高く、防衛効果を高めている。

V郭

V郭はI郭の北方に伸びる尾根及び斜面を削平した逆「く」の字形の平場である。斜面の削平部はI郭の腰曲輪ともいえる。この郭はI郭との比高が9~12mもあり、II・III・IV郭とは性格が異なるが、その下に巡る腰曲輪の存在から本城跡の主要部の一つと推定される。

腰曲輪 (ア・イ・ウ・エ・オ・カ)

I~V郭を取り囲むように、斜面を削平した幅4~10mの平場が標高53~55mで帯状に巡る。これは1~2mの段差及び、尾根を掘り切って土塁状に残した部分を境として、さらにその形状等から、大きく6区に分けられ、便宜的に東から西へ(ア)~(カ)と名づけた。(ア)は主要部から南東に伸びる尾根(A)の斜面にIV郭を囲むように造られ、南東へ続く痩せ尾根に連続する。IV郭正面にはやや広い空間が造られており、尾根筋に沿って深さ約1mの堀が約20m伸び、東側斜面からの遮蔽となっている。この地区は、主要部へ連絡する重要な位置であり、おそらく大手筋と考えられる。西側の急斜面には尾根を掘り切って結ばれた狭い平場がIII郭下まで伸び、その端には比高0.5~1mの土塁が存在する。III・IV郭東側に伸びる部分は尾根(B)と連続し、遮蔽の意味を持つ。(イ)は(ア)から約3m高く、I・III郭の本漸寺側、尾根(B)・(C)の基部の中間に位置し、中央南よりに約1mの段差をもって北側が高い。(ウ)は(イ)より約2m低く、尾根(C)の削り残しが土塁状を呈して区画される。(ウ)・(エ)・(オ)はV郭を囲むように位置する。特に(エ)は深く掘削されているため、斜面及び尾根(D1・2・3)の基部を削り、弧状の堀切となって尾根筋を有効に遮断している。(カ)はII郭の西半分の下に位置し、尾根(E)の堀切底に連続する。

尾根(A)と斜面の造成

江戸時代初めの東金御殿建設・近代以降の東立東金高校の敷地拡張及び削平・擁壁工事・町並の拡幅等によって大幅な改変がなされた部分である。尾根頂部は数ヶ所で段状に整形されているが、多くは自然地形のままである。その中で注目されるのが平場(キ)の部分である。全体的に尾根を長さ約20m切って、両側は高さ1~1.5mに掘り残して土塁としている。尾根と平場との比高は主要部側で7~8m、その先は5~6mある。斜面の整形は相対的に緩やかな北側にみられる。基本的には平場は斜面中腹に連続する狭い帯状のもの、縁辺部、その間の小さなものの3種である。そして堅堀(a)は斜面中腹の平場と主要部へつながる平場(ア)と連続する。これは通路の一つとして考えられよう。

尾根(B)と斜面の造成

尾根(B)は現在東金高校と本漸寺の間に伸びる。尾根頂部の整形は数箇所の段・平場・檜台状の高まりである。縁辺部は高校敷地と基地によって削平されており、特に後者の平場は城に伴うものか、以降のものかの判断は難しい。高校側については中腹に連続する幅3~5mの平場があり、上の平場(ア)へ続く緩やかな堅堀(b)を有する。この堅堀の存在は尾根を

土塁同様の機能を持つと考えれば、本漸寺側の防御をより意識したものであり、さらに通路としての機能が窺われる。尾根(A)に比べ、造成の手が込んでいる理由としては尾根及びその斜面の傾斜が緩やかなことを挙げることができよう。

尾根(C)と斜面の造成

主要部北の腰曲輪(イ)・(ウ)から北北西に伸びる尾根(C)は本漸寺の裏手を回り、途中から二股に分かれる(C1)(C2)。この尾根に囲まれた部分(大多和医院敷地)は江戸時代には板倉氏の陣屋が構築されている。尾根頂部の整形は主に段と堀切(c)・(d)である。なお本漸寺境内の北にのびる尾根(C1)の先端頂部はやや広くなり、平場の存在した可能性があるが、基地の造成による変更のため不明である。斜面の平場は①(C1)(C2)共に北側に尾根頂部から5~10m下、幅約3~10mで、随所に比高1~2mの段差を有して帯状に連続するが、(C2)南側では断続的になるもの、②(C1)(C2)に囲まれた谷斜面に①の下にも同様に帯状に展開する平場、③それらの中間の小規模な平場に分けられる。そして、(C2)の①と(C1)の②が(C2)先端部で連続する形となる。なお、注目すべき点として、(C1)の①の尾根側、つまり尾根(C1)頂部の北側直ぐ下に、整堀状の堀がある。この配置は尾根(A)と基本的に同じであり、尾根(A)ともに本漸寺側に対するの防御が他の尾根に囲まれた部分より強固であることが明らかである。

本漸寺境内とその周辺

伝承によれば本漸寺は酒井定隆の東金城入城と共に現在地に移されたとのことであり、酒井氏の館跡を東金御殿跡に推定する一つの根拠とされている。本漸寺の本堂他の所在する部分は南北に長い長方形を呈し、約100m×約40mの広さであり、その下との比高は10m程もあり、この部分の斜面の大規模な削平が窺われる。また、東金高校を囲む尾根の崖から当初の地形を復元すると、東金御殿跡に比べ本漸寺境内の比高が10cm程も高いものと考えられる。本漸寺境内周囲の斜面の整形は主に尾根(B)側に多い基地と西の主要部方向の斜面の基地及び、幾つかの平場に見られる。基地については踏査した限り、江戸時代以降の墓石ばかりで中世の五輪塔・宝篋印塔等は見当たらない。また、平場(ク)は当初はさらに本漸寺側に続いていたことが推測される。以上の点及び両側の尾根の整形を考えると、①酒井氏居館は現在の東金高校の敷地内で本漸寺は現在地、②酒井氏居館と本漸寺が同じ平場に存在した、③酒井氏の去った後にさらに造成を行って本漸寺が現在地に造られた、④酒井氏の去った後に新たに斜面を造成して本漸寺が現在地に造られた、等の幾つかの可能性の中で、③が最も適当であると考えられる。

尾根(D)と斜面の造成

尾根(D)はその基部から半ばまで頂部を削平してV郭が造られ、腰曲輪(ウ・エ・オ)を基部に3本の支尾根(D1)(D2)(D3)が伸び、尾根頂部が段状に整形されている。この地区で注目されるのは(D1)の東側斜面の整堀(e)・(f)である。(e)を登ると平場に

出、さらに尾根伝いに(f)が存在し、腰曲輪(ウ・エ)につながる。遠山氏作製の概念図ではさらに(D2)と(D3)の間の塹壕を入れているが、自然崩壊によるものと考えられよう。いずれにしても、腰曲輪(エ)の堀切及びV郭と相俟って、平場から主要部への短かな距離及び緩斜面に対処するための綿密な処理と考えられよう。また、同時に、これは通路の一つとして考えられる。

尾根(E)と斜面の造成

尾根(E)は西及び北方の丘陵・台地と連結する尾根である。尾根頂部の整形は自然地形が多いが、腰曲輪(カ)の延長が堀底となる堀切(g)、堀切(h)、堀切(i)や小規模な平場が存在する。堀の比高はそれぞれ東・西が、約5m・約3m、約5m・約4m、約9m・約1mである。斜面の平場として注目されるのは(キ)である。堀切(i)の堀底と連結し、内側には深さ約1mの堀を造り出している。このようにこの部分の防壁は固く、堀切(i)はそれ以西の尾根頂部が低く、自然地形であることから、城域の西端と考えられる。なお、西側尾根の斜面にも平場が存在するが、当初は横穴墓の前庭部であったものと考えられ、城に伴うものかどうかは不明である。平地と比高が余りないため、或いは、虎口の一つである可能性もある。

尾根(F)

尾根(E)の堀切(i)手前から北に伸びる尾根である。尾根頂部は平坦な狭い自然地形であるが、半ばで比高約7mの急崖となって、その下に小規模な平場と尾根が続く。

根古屋・宿

「根古屋」については市村高男氏は城郭中心部に対する防壁の一部であり、一面では城郭外郭部として中心部から峻別されたとする¹³⁾が、東金城の根古屋地区についても、防壁上の理由を根拠として、これらの尾根の囲まれた部分に比定したい。江戸時代にそこに東金御殿・板倉氏陣屋が築かれたことさらに尾根(B)の塹壕等もそれを裏付けるものと考えられる。なお、その屋敷は非日常的・非恒常的な仮設された暫定的建物と考えられ、それぞれが独自の根拠地を有していた筈である。また、基本的には商工業者を中心とした町場である「宿」¹⁴⁾については、遠山氏が「城下集落」として鍵の手状の箇所存在から、かつての銃子街道、旧国道126号沿いの町並部分に比定している¹⁵⁾。しかし、これらの点については、今後、現地調査、文献・民俗学調査等様々な手法による研究によって結論を出すことが必要であろう。

関係する城跡について

酒井定隆が土気城から東金城に移る間に拠ったといわれる田間城跡については遠山氏が縄張り図を作成している¹⁶⁾。これによると、①最高部の小規模な郭(I)とその下の長い郭(II)を主要部とする、②IのII側に土塁、両郭間に堀と土橋状通路を有する、③主要部の下南側急斜面以外に腰曲輪を巡らす等の東金城跡との共通点がみられる。また、土気城・大椎城¹⁷⁾は台地先端

部の占地によることも起因するだろうが、東金城にはない戦国末期特有の堀・土塁の折り歪みを多く取り入れており、これらの城及び酒井氏との関係はさらに検討を要する。

注1) 「山武郡の古城址」 1972

(2), (5), (6) 「東金酒井氏の居城—東金城について」 前掲

(3), (4) 「中世城郭研究の一視点—史料と遺構の統一把握の試み」 『中世東国史の研究』 東京大学出版会 1988

(7) 三島正之は大椎城を戦国末期には酒井氏の支城であると考えている。(『中世城郭事典』 第1巻 —土気城・大椎城— 1988)

参考文献 「千葉県埋蔵文化財分布地図」(2) —千葉市・香取・海上・匝瑳・山武地区— (財)千葉県文化財センター 1986

4. 発掘調査

(1) 調査方法と調査経過

発掘調査は、昭和63年11月11日から11月15日の5日間にわたって実施した。発掘調査に先立って、伐採を実施し、調査区を設定した。調査区は、I郭とII郭の地形的関係及びそれぞれの遺存状況、防衛施設の実態把握を目的として、I郭からII郭に向けて、方位をN-43°-Eとして設定した。

I郭には長さ15.5m、幅2m(Aトレンチ南区)と長さ4.5m、幅2m(Aトレンチ北区)、II郭には長さ30m、幅2m(Bトレンチ)の各トレンチを設定した。

調査面積は、Aトレンチ40㎡、Bトレンチ60㎡であり、総計100㎡である。

(2) 調査の概要

遺構 (fig. I-3, 4)

Aトレンチ 本トレンチは、I郭平坦部の遺存状況及び遺構内容、I郭の櫓台状土壇の内容の把握を目的として設定した。

Aトレンチの調査によって、I郭平坦部に鍛冶遺構、中世における櫓台状土壇の造成等を確認できた。土層断面からI郭平坦部をみると、第1層(表土層5cm)、第2層(明褐色土層10cm)、第3層(暗褐色土層20cm)で第4層のローム層に達する。また、その造成は1期・ローム層まで削平、2期・櫓台状土壇ないし土塁の版築、3期・土壇上の近年の盛り土の大ききく3時期に分かれることが確認された。

鍛冶遺構 (fig. I-4; 1~3)

Aトレンチの調査において、鍛冶関係と考えられる遺構が4基確認された。1(SK01)は、炭の混入した小土坑であり、スラグが出土している。径65cm、深さ20cmを測り、隅丸方形を呈する。2(SK03)は焼土混入の小土坑である。径52cm、深さ25cmを測り、円形を呈する。3(SK04)

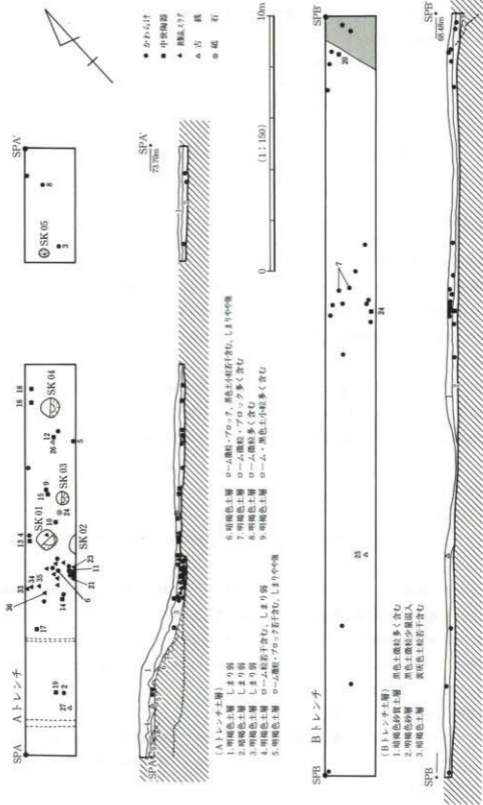


fig. 1-3 発掘区平面図・土層断面図

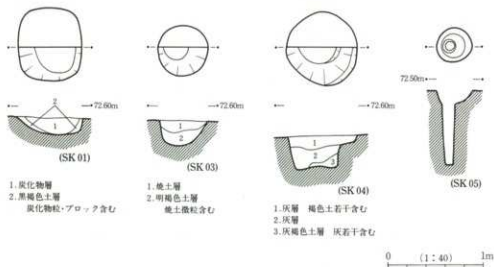


fig. I-4 土坑・柱穴平面図、土層断面図

は、灰を混入する小土坑である。径75cm、深さ35cmを測り、楕円形を呈する。他 (SK02) に焼土混入の土坑 (径50cm) が1基検出された。これらの4基の土坑周辺にはスラグが集中して出土している。なお、3の覆土からかわらけ片が出土していることからこれらの遺構が本城跡に伴うことが考えられる。

本トレンチにおいて確認したこれらの焼土、灰、炭混入土坑とスラグの集中箇所が存在は、それらに関連しているものであり、鍛冶遺構であったことを予想させるものである。今回の調査は確認調査であるため、これらの性格については、今後の調査に待ちたい。

槽台状土壇 (fig. I-3)

本城跡は第二次世界大戦中に陸軍によって改変を受けたとの話もあり、I郭は、大戦後、桜の名所として知られていた。発掘の結果、表土から約40mまでは非常に柔らかな土層であったが、これを境とし硬質な面に変わることを確認できた。この土層はロームブロック、ローム粒を混入する暗褐色ないし明褐色土が互層となっていて人為的に固められたものである。また、ボーリング棒で探査したところ、ローム層の地山はAトレンチ南端で地表からの深さ約1.5m、そこからトレンチ内を北へ約1.5mの地点で地表からの深さ約1.8mとなり、I郭平坦部のローム面に続いた。I郭平坦部は第1層が表土層、第2層が明褐色土層、第3層が暗褐色土層であり、後世の攪乱を受けていることから、I郭がローム面まで削平された後に槽台状土壇を構築したものと推定できる。すなわち、槽台状土壇上に、大戦中に軍事目的あるいは近年観桜のために盛土されたと考えることができる。

小土坑 (fig. I-4:4)

Aトレンチの北区から円形を呈し、径37cm、深さ80cmの小土坑 (SK05) が検出された。形状から柱穴と考えられるが、対応する柱穴は不明である。

Bトレンチ

Bトレンチは、第二次世界大戦中陸軍によって削平されたといわれているII郭の保存状況の確認も考慮してII郭の長軸に沿って設定した。長さ30m、幅2mである。調査の結果、枯れ葉や根の直下に腐植土を含む砂層が現れ、地表下約20cmで砂層の岩盤(成田層)に達した。このような平坦な削平状況から第二次世界大戦中陸軍によってなんらかの改変を受けた可能性があったものと考えられる。しかし、地表下数cmにかわらけを主体とする遺物が出土していることから、陸軍による削平は予想に比して小規模であり、むしろ本城の築造時に相当量の削平があったと考えた方が自然であろう。

また、BトレンチでI郭の急崖に最も近い区域に溝状の落込みを確認した。崖崩落の危険性があるため発掘調査を実施できなかったが、その溝状の落込みをI郭とII郭を画するための空堀と考えることができる。

遺物 (fig. I-5)

本調査が確認調査であり、面積約100㎡という限定した部分の発掘であったが、城に伴う遺物が比較的多数出土した。

(1) 土器

以下の他に実測不可能ながら、土壇中から6世紀に比定される土師器片が数点出土した。

縄文土器 (fig. I-5:1) 縄文時代早期糸痕文系土器である。竹管状工具によって横性に沈線が施されている。田戸下層系に比定される。Aトレンチ櫓台状土壇上層出土。

かわらけ (fig. I-5:2~8) 7はBトレンチ、他はすべてAトレンチ出土である。2は櫓台状土壇の上層から出土した。

番号	現器高	口径	底径	遺存度	成形	胎土	焼成	色調
2	2.8	9.4	4.6	9/10	ロクロ(左回転), 回転糸切り	石英及び黒色微粒子混入	やや不良	黄橙色 (7.5YR7/8)
3	2.5	11.0	6.2	1/5	ロクロ(左回転), 回転糸切り	石英及び黒色微粒子混入	やや不良	黄橙色 (7.5YR7/6)
4	(1.0)	—	4.3	底部	ロクロ(右回転), 回転糸切り	石英及び黒色微粒子混入	やや不良	浅黄橙色(7.5YR8/4)
5	(1.8)	—	5.3	1/10	ロクロ(右回転), 回転糸切り	石英及び黒色微粒子混入	やや不良	浅黄橙色(7.5YR8/4)
6	(1.3)	—	5.7	1/4	ロクロ(不明), 回転糸切り	石英及び黒色微粒子混入	やや不良	いぶい浅黄橙色(10YR7/4)
7	(1.6)	—	5.9	1/5	ロクロ(右回転), 回転糸切り	石英及び黒色微粒子混入	不良	浅黄橙色(7.5YR8/4)
8	(1.0)	—	5.0	1/4	ロクロ(左回転), 回転糸切り	石英及び黒色微粒子混入	不良	橙色 (5YR7/6)

Tab. I-1 かわらけ計測表

(2) 陶器

大甕 (fig. I-5:9~15)

ここに一括したのは、常滑の大甕である。9~11は肩部、13~14は胴部下半に推定される。15は胴部から底部にいたる部分である。9、10及び11、12はそれぞれ同一固体である。9の外には格子文が認められる。9~15の胎土には微粒な長石粒を多く含むが14は量的に少ないこ

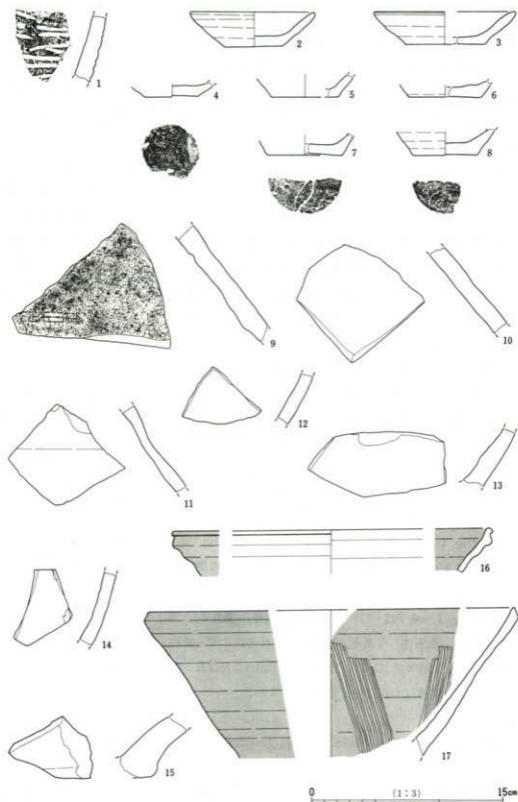


fig. I-5 出土遺物実測図(1)

とと恐らく焼成の違いのため他の常滑とは異なり、表面が滑らかである。9, 10の内面は灰黄褐色(10YR5/2), 外面は褐色(7.5YR4/4), 11, 12の内面は灰黄褐色(10YR6/2), 外面はにぶい黄褐色(10YR7/3), 13の内面は灰褐色(5YR5/2), 外面は暗褐色(10YR3/2), 14の内面は灰褐色(5YR5/2), 外面はにぶい赤褐色(7.5YR4/3), 15の内面外面とも暗赤褐色(10R3/2)をそれぞれ呈している。出土地点はいずれもAトレンチの4基の土坑周辺であり、数個体の壺がまとまって散乱した状況である。

擂鉢(fig. I-5; 16, 17, fig. I-6; 20) 瀬戸・美濃系。16(Aトレンチ出土)は口縁部外面の稜が明瞭である。推定径25cm。内外面に鉄釉が付着している。胎土に石英、長石微粒子を若干含む。黄褐色(10YR7/3)。17はAトレンチの櫓台状土壇縁部の上層から出土した。現器高11.7cm, 口径28.8cm, 遺存度1/6。口縁部断面の三角形の厚みが薄い。1単位15本の櫓目状工具により、筋目は推定6本である。表面は暗赤灰色(10R3/1)。胎土は浅黄色(10YR8/3)。20はBトレンチから出土した。推定口径41.0cm, 口縁部断面の三角形状突帯が顕著である。表面は黒褐色(10YR3/2), 胎土は浅黄色(2.5Y8/3)。これらはいずれも16世紀前半から第3四半期の所産と推定される。

香炉(fig. I-6; 18) 瀬戸・美濃系。灰釉。口縁部外面に2本の条線が巡る。釉は灰白色(10Y8/2), 胎土は淡黄色(2.5Y8/4)。Aトレンチ出土。推定口径41.0cm。

小皿(fig. I-6; 19) 瀬戸・美濃系。灰釉。貫入が多い。外内面は淡黄色(5Y8/3), 胎土は淡黄色(2.5Y8/3)。推定口径11.0cm。Aトレンチ櫓台状土壇の上層から出土した。

(3) 金属製品

小札(fig. I-6; 21) 鉄製である。幅22mm, 現長89mm, 重さは3.6g。現存では7カ所に孔が穿たれている。Aトレンチ出土。

鉄釘(fig. I-6; 22, 23) 鉄製である。22は頭巻の釘であろう。長さ40mm, 断面4.5mmを測る。重さは4g。23は頭部を叩いて平たくした後、折り曲げたものと考えられる。現長19mm, 断面4.5mmを測る。重さは2g。Aトレンチ出土。

古銭(fig. I-6; 25~27) 25は「景祐元寶」(篆書体), 26は「元祐通寶」(真書体), 27は「宣徳通寶」(真書体)である。初鑄年はそれぞれ北宋・景祐元年(1034), 北宋・元祐元年(1086), 明・宣徳8年(1433)である。出土地点は25はBトレンチ, 26・27はAトレンチである。なお、計測値はtab. I-2を参照されたい。

(4) 石製品

砥石(fig. I-6; 24) 現長8.5cm, 幅3.3~4.5cm, 厚さ2.5cm。使用痕は1面のみに認められる。Aトレンチ出土。

参考文献 井上喜久雄 美濃編年表「日本やきもの集成3」「大阪城三の丸跡II」大手前女子大学史学研究所・大阪城三の丸跡調査委員会 1983

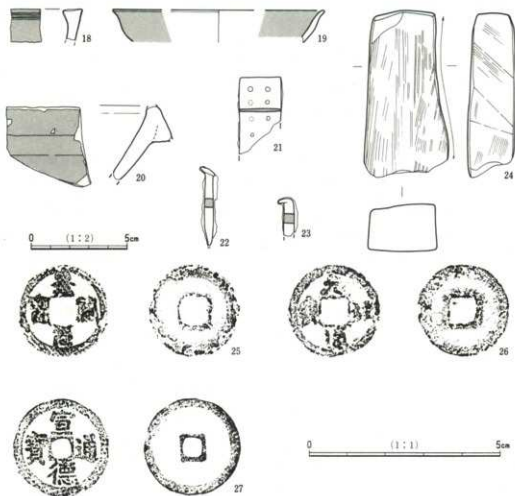


fig. I-6 出土遺物実測図(2)

番号	銭貨名	W (g)	G (mm)	N (mm)	G (mm)	n (mm)	T (mm)	t (mm)
25	景祐元寶	2.06	23.79	18.59	7.57	6.38	0.91	0.65
26	元祐通寶	2.12	24.00	19.25	7.95	6.35	1.08	0.81
27	宣德通寶	3.52	25.27	19.80	6.00	4.40	1.22	0.67

* 各計測点は以下のとおりである。

$$\text{外縁外径 } G = \frac{Ga + Gb}{2}$$

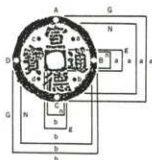
$$\text{外縁内径 } g = \frac{ga + gb}{2}$$

$$\text{内郭外径 } N = \frac{Na + Nb}{2}$$

$$\text{内郭内径 } n = \frac{na + nb}{2}$$

$$\text{外縁厚 } T = \frac{A + B + C + D}{4}$$

$$\text{文字面厚 } t = \frac{a + b + c + d}{4}$$



Tab. I-2 銭貨計測表

5. 結 語

今回の調査は確認調査であり、発掘面積が100㎡と制約されたものであり、本城の内容を十分知り得たものと言えないが、測量調査及び発掘調査によって従来知られていなかった点もいくつか確認することができた。以下、その結果をまとめて結語としたい。

1. 測量調査の結果

(1)規模及び立地 本城は丘陵先端部に占地し、その最高部は標高74m余り、規模は東西約700m、南北約500mの規模を有する。

(2)施設 本城は典型的な山城であり、丘陵最上部に5つの郭を配し、その下に腰曲輪を巡らせ、さらに四方に伸びる尾根上及び斜面に多くの平場・空堀・堅堀・土塁等の防御施設を適所に配置している。また、城主の居館跡を現在の本漸寺境内に推定したい。

(3)機能及び時期 文献史料からは15世紀半ば～16世紀末に推定されている。土塁、空堀の折歪は見られないが、広大な天険の地形を有効に生かした数多くの施設の充実した配置から、国人領主クラスの本城として、戦国時代末期にその機能を閉じたものと考えられる。

2. 発掘調査の結果

Aトレンチでは、I郭に鍛冶関係と考えられる遺構が確認された。東金城に関係するものとも考えられるが、断定できない。また、本城跡は3期に亘って人の手が加えられてことが明らかとなった。まず、I郭平坦面をローム層まで削平した時期、次いで櫓台状土壇を構築した時期、さらにそれを利用して軍事目的或いは観桜用土壇を構築した時期である。

II郭に入れたトレンチでは、I郭直下に空堀が検出された。また、表土が腐植土を含む砂層であり、20cmをもって砂層の地盤が現れることから、第二次世界大戦中陸軍による削平も事実のようである。しかし、表土直下からかわらけが出土していることから、東金城構築時に相当の地山整形が施されたと考えられる。

両トレンチの出土遺物は16世紀中葉から後半であり、少なくともこの時期に本城が使用されていることが確認された。

3. まとめ

本城は、当地域においては、例を見ない丘陵地形を利用した典型的な山城的縄張りを有している。また、市街地からの比高は約60cmあり、主郭の周囲に曲輪、堀を配した堅固な守りの城である。第二次世界大戦中陸軍によって削平されたと思われる部分も認められたが、これが本城の重要性を若干なりとも、減ずるものでないことを確認できた。

本城の城域及び関連施設は今回測量の対象地となった丘陵部をもって全てではない。さらにその解明の為には旧東金市街地をも含めた広い範囲の中で考えていく必要がある。ここではそれらを含んだ研究の重要性を確認するに止めておきたい。

II 千葉市城山城跡

1. 城山城跡の占地と地理的環境 (fig. II-1)

城山城跡は、千葉市街から東南東約4.5kmに位置し、都川支流を望む標高約32mの台地突出部とそこから伸びる尾根上に占地する。地番は千葉市大宮町1562-2であり、現状は山林・畑・日枝神社境内である。

千葉市内を西流して東京湾に注ぐ都川は、千葉市の東にひろく広がる下総台地を樹枝状に開析して複雑な地形を呈している。都川は当地域では本流・支川都川からなり、これらによって形成された東西に長くのびる舌状台地上に城山城跡が所在する。この台地の北側は緩傾斜、南側は急峻な傾斜であり、南側の仁戸名支谷に面する台地突出部には西から城の腰城跡・城山城跡が立地している。これは当地域の城跡に共通する特徴的な占地形態である。

かつて、城山城跡のすぐ南に東金街道が存在し、交通の要所であったこの地には、最近、これらの遺跡を結ぶように千葉東金有料道路が建設され、城山城跡の占地する台地もこれによって基部で分断されることとなった。しかし、道路建設以前の地図によると、この台地は仁戸名支谷と本流から続く小支谷が台地との基部に集中して独立台地的状況を呈していたものであることがわかる。

以上、本城跡の占地には、独立台地的地形、谷に北面する台地斜面が急峻であったこと等地理的要因及び旧東金街道という交通上の要因が大きく影響しているものと考えられる。



- 1. 城山城跡
- 2. 栄福寺館跡
- 3. 中山城跡
- 4. 福星寺館跡
- 5. 木出館跡
- 6. 堂屋敷館跡
- 7. 夕鶴城跡
- 8. 加曾利館跡
- 9. 矢作砦跡
- 10. 猪鼻城跡
- 11. 多部田城跡
- 12. 城の腰城跡
- 13. 星久喜館跡
- 14. 月の木砦跡
- 15. へたの台砦跡
- 16. 梅屋敷跡
- 17. 東光院館跡
- 18. 藤業城跡
- 19. 大蔵寺館跡
- 20. 立堀城跡
- 21. 平山城跡
- 22. 柏崎砦跡
- 23. 北生実城跡
- 24. 長山砦跡
- 25. 大覚寺館跡
- 26. 有吉城跡
- 27. 南生実城跡
- 28. 城ノ台城跡
- 29. おちない台館跡
- 30. 椎名崎城跡
- 31. 木の岡城跡
- 32. 金城寺城跡

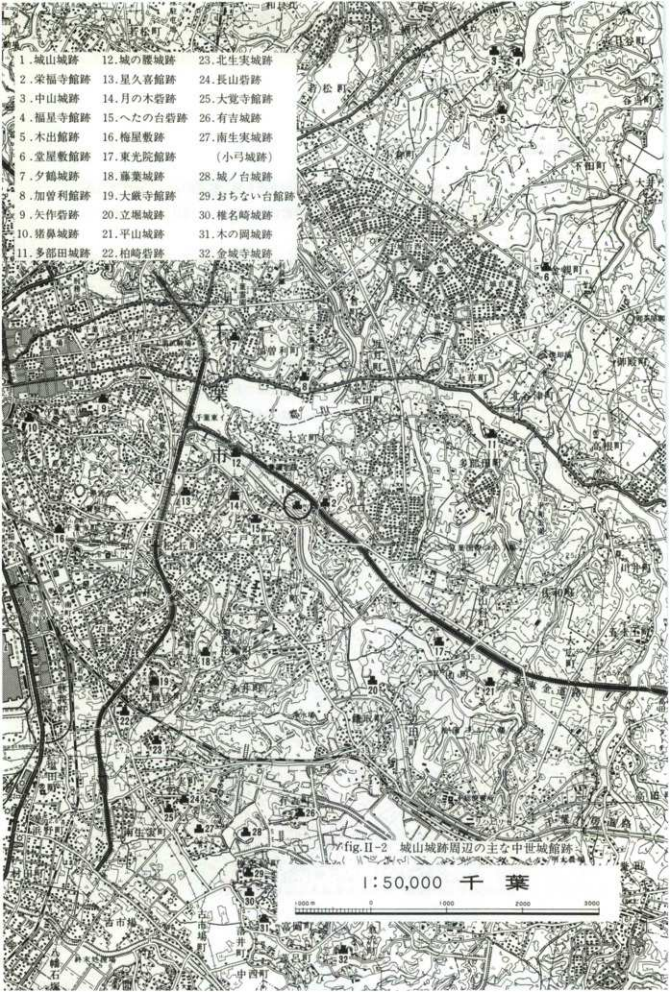
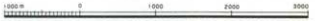


fig. II-2 城山城跡周辺の主な中世城館跡

1:50,000 千葉



2. 城山城跡の歴史的環境 (fig. II-2, 3)

城山城跡の所在する千葉市大宮町とその周辺には、数多くの遺跡が分布する。縄文時代としては加曾利貝塚・月の木貝塚・へたの台貝塚等、弥生時代としては星久喜遺跡等、また中近世城館跡としては城の腰城跡・栄福寺館跡・月の木砦跡・へたの台砦跡・加曾利館跡等が知られている。本城跡と関連性が考えられ、発掘調査の実施された遺跡としては、千葉市城の腰・西屋敷遺跡¹⁾がある。以下、その概要を記しておこう。

千葉市城の腰遺跡からは、先土器時代、縄文時代～古墳時代に至る集落、城郭の存在が確認された。城の腰城(別名長峯城)は舌状台地の先端部に立地し、多郭形を呈している。調査は主郭と想定される一辺約150mの三角形平坦部の一部、これに伴う高さ3.5～5.5mの土塁、空堀を対象として実施された。この結果、主郭平坦部においては遺構を検出できなかったが、土塁、空堀の構築法等に多くの成果を得た。遺物としては、陶器類(古瀬戸、常滑、瀬戸美濃)、古銭などが出土した。

千葉市西屋敷遺跡では縄文時代～近世までの遺構・遺物が多数検出された。調査対象地域は長さ125m、幅35mであり、その南半には中近世の台地整形区画が認められ、多数の土壌が発見された。その内の数基から人骨が検出され、墓地の可能性も考えられている。遺物としては中近世陶器類(古瀬戸、常滑、美濃系)、金属製品(和鏡、古銭、喫煙具)が目目された。

城山城跡の存在する大宮町大字坂尾は、かつての千葉池田郷内に比定されている。中世の城山城跡および大宮の集落に関する直接的文献史料はないが、同町内に保存される近世文書²⁾から、近世以前の当地域が坂尾村であり、西隣には長峯村が存在していたが、以後、服部半蔵領地長峯村1か村となったこと、「村切り」によって元和2年(1616)以降に服部氏と板倉氏2家の領主により支配され、延宝7年(1679)には同村が坂尾村と長峯村に分村したことが記されている。また、千葉東金有料道路を挟んで東に所在する坂尾山栄福寺に所蔵される『坂尾見聞録』³⁾および『金剛授寺由緒之覚』⁴⁾の2点の近世文書が当地域の中世の世界を覗かせてくれる。いずれも江戸時代末期のもので、当時の住職が伝承を記録したものである。栄福寺は、周囲には高さ1～2m程の土塁を約50m四方に巡らせ、空堀の一部が残る中世館跡であり、境内には室町時代後半の所産と考えられる五輪塔の火輪部・宝篋印塔の笠部が存在する。さらに、境内に妙見堂が建てられており、中世においては千葉氏と密接な関係を推測させる。以下の記事は、『坂尾見聞録』および『金剛授寺由緒之覚』の2点から城山城跡に直接関係するものとして、原文が理解しやすいように空白と()を入れ、他に中世の世界を描いているとみられる記事を抜粋したものである。

『坂尾見聞録』(1818年)

城山 城の腰

右の地名ハ寛永年間（1624～44年）以前板倉筑後守 今栄福寺境内ハ此地に本城を築き住すること久しき由なれ共 御所替なされし際 現今の栄福寺を御垂ヶ台（位置不明）より此地へ移されたり 板倉筑後守陸奥へ移転の後 坊谷沢日吉権現の地付近を城山と名づけたり又栄福寺より青柳へ行く地の右なる高嶺の地即ち突出したる地を城の腰と名付けたり。坂尾の土地 元坂尾五郎治の地所なれども 時世の変遷に依り 中興板倉筑後守の領分と成る。

（御館の池）城山の裏にあたる低き地、（上宿台…小字宿か）昔繁盛なる旧地の台、（譜台）元坂尾五郎治公の譜代の住する地、（金垢龜山）坂尾五郎治公の時代に此の地に鍛冶職多く住めりと云う。（馬立場）坂尾五郎治公の譜代等の馬立場、（木戸樺…小字木戸坊か）元衆人の出入りする木戸。坂尾五郎治公の木戸を指すと云う。（和木の池）大館に近き池、（かま谷）…坂尾五郎治公の戦用糧食所、（馬場）…元坂尾五郎治公の馬場、（一上）旧坂尾五郎治の開村地の傍にあり、郷民売買の市場を定め、繁華を極めた、（日枝神社）栄福寺に做って泉福寺改宗（真言宗から天台宗—17世紀前半）の際に右の高地（城山城跡か）に山王権現を勧請した時から大比叡権現を信念し、日吉山王権現境内へ掃役者を置いた。

『金剛授寺由緒之覚』（1821年）

（館見端）坊谷津（泉福寺ある場所）の並木入り口にあり。此の橋より寅の方向（北東）に当たって坂尾五郎治公の館あり。此の橋より五郎治公の館見ゆるが故…。〔幽霊松〕坂尾五郎治公が名づけた。（十阿彌陀…小字十綱か）坂尾五郎治建立。（坂尾桜）坂尾五郎治公の御屋敷、妙見堂付近、金剛授寺へ五郎治公が山桜等を植えた。（姫桜）天承元年（1131）坂尾五郎治公の奥方の病の治療祈願の為、自ら植えた。（武具塚聖天…小字上人塚か）坂尾五郎治公の末孫代に至り、農業專業となり、武具を埋めた。（長峯村）坂尾五郎治公の末孫を長峰田所三郎に嫁がせた。（栄福寺）真言宗金剛授寺を天台宗に改宗の際（寛永2年（1625）正月17日）養福寺に、慶安3年9月24日栄福寺に。また、泉福寺（字坊谷津）・安楽寺（花輪）・西光寺（下坂尾）・長福寺（上坂尾）等周辺の寺院は皆栄福寺の末寺であり、改宗の時も従っている。

以上の記事によると、まず、今の栄福寺境内は近世初頭には板倉筑後守の居館であり、「城山」は詰めの城であったという解釈ができる。しかし、城の遺構は戦国時代のものであり、発掘調査の結果、中世以降としては14～16世紀の遺物が検出していることから、栄福寺境内も含めてその築城・使用年代は中世後期に遡るものと考えられる。なお、地元の聞き取りによると、都川本流の谷から続く小支谷にはかつて水田が展開しており、その奥にあたる栄福寺の裏手の低地には水田灌溉用の取水口があり、坂尾村と長峯村に分けていたとのことである。栄福寺館跡は高台にあり、その堀の水が直接、灌溉用水につながることも考えられ、領主の勤農権と関わりあるものであろう。また、この近辺の小字は「宿」であり、「昔繁盛なる旧地」というの



fig. II-3 城山城跡周辺の地形図と小字名 (千葉市都市図使用) 1:2,500

も、或いは確かなものかもしれない。後藤和民氏は、台地上の集落が中世以降(11世紀頃から)にほとんど見られなくなることを挙げ、在地武士の私領地の拡大政策として、谷・荒地の開発促進を目的とした生産者集団の居住地が台地上から低地(台地縁辺部)に移行し、同時にそれを守る城を築城したとする⁶⁾。築城の時期的問題はあると考えられる⁶⁾が、集落の移動と築城の基本的根拠は当地域もこれに該当するものと考えられる。板倉氏以前の領主として挙げられる坂尾五郎治に関する記事は、当地域の開発領主としての姿を現していると思われる。その初見年代は天承元年(1131)である。これらの真偽は不明であるが、江戸時代中期の『千葉實録』⁷⁾には、平忠常の乱(1028~31年)の時、忠常の子千葉常得共に討ち死にし、常得の子亀壽丸(常長)の脱出に従った者の内、また、その後、源頼義の奥州安部氏追倒に従った者の内に坂尾五郎治の名が見える。或いは、年代的には栄福寺所蔵の2史料が『千葉實録』に従った可能性もあるかもしれない。なお、後に編纂された『千葉郡誌』⁸⁾(1926年)には「千城村大宮字坊谷日枝神社の西にあり。往古板倉筑前守の城山なりしと云ひ傳ふれども詳ならず。」、『日本城郭体系』⁹⁾には「坂尾五郎治(千葉氏家臣)が治めていた地。城の腰城と同じ板倉筑前守が築城」とされており、『坂尾見聞録』に拠っている。

なお、日枝神社の記事については、これが同社の創建と考えられ、中世には日吉(枝)神社は存在しなかったらしい。17世紀後半以降の文書(坂尾村書上張)¹⁰⁾には「除地」として「日吉権現」がある。境内の竣工記念碑によると、現在の日枝神社は、昭和2~3年に地鎮祭・起工式・竣工式・遷宮式が行われ、石段は昭和38年7月に竣工されたということである。

次に12世紀以降の周辺の状況をみていきたい。

千葉介常重が猪鼻に館を構えたときされるのは大治元年(1126)である¹¹⁾。以降、千葉氏一族が千葉・池田・三枝・糟苅諸郷を含んで成立していたと考えられる千葉庄に勢力を拡げていく。原氏の祖である千葉常途(原四郎)が小弓城(南生実町)を築き、坂尾五郎治が妙見神、金剛授寺、大宮権現等を建立したときされる(栄福寺境内妙見堂前の坂尾山栄福寺沿革の碑)のもこの頃である。治承4年(1180)、源頼朝が石橋山の合戦に敗れて安房に着いて上総に入った時、参上した千葉常胤・胤政父子に従った7騎の中に、加曾利冠者成胤・長峯所三郎胤行の名がある¹²⁾。長峯は近世に坂尾村と合併する西隣の村であり、加曾利はその北の村である。ここで、千葉庄内の村郷を名字の地とする開発領主(土豪層)の存在と、彼らと千葉氏との主従関係が認められる。南北朝期には、城山城跡の南、仁戸名町の仁守寺より、永和5年(1379)銘と永徳2年(1382)銘の題目板碑(南無妙法蓮華經)が発見されており¹³⁾、中山法華経寺(八幡庄)との関係が考えられる。また、応永13年(1406)の「香取神社造営科足納帳」¹⁴⁾に星基(星久喜)に2丁6反180歩の領地を持つ千葉氏家臣・円城寺左衛門五郎、長峯に1丁5反の領地を持つ僧・清楚勝主座の名が見える。房総における戦国時代の始まりといわれる享徳・康正期(15世紀半ば)には、鎌倉公方足利成氏と関東管領上杉氏の対立から、康正元年(1455)、成

方氏の原胤房・馬加康胤が猪鼻城の千葉胤直・胤宣父子および円城寺氏を滅ぼす。この時、千葉氏の大きな影響下にあった当地域が原氏他の攻撃を受け、以後、原一族の勢力下に入ったことが考えられる。仁戸名では在地土豪岡田氏と婚姻関係で結ぶ形で、原親胤の末子胤善が進出し、胤善の子が牛尾氏の祖となる¹⁹⁾。以後、仁戸名牛尾氏は衰微し、仁戸名の仁守寺(曹洞宗)が、原氏の菩提寺臼井の宗徳寺の末寺であることなどから、原氏本宗家ともいべき小弓・臼井の原氏が進出したと考えられるが、永正14年(1517)に小弓城は、足利義明を載せた武田・里見同盟軍に落城させられる。しかし、天文7年(1538)第一次国府台合戦の後、北条氏綱が小弓城に入城し、元小弓城主原孫二郎胤清は小弓に帰り、北方に生実城(北生実城)を築城し、翌年移住している。永禄4年(1561)には、本佐倉城(千葉介胤富)、臼井城・生実城(原胤貞)が、里見義弘重臣正木大膳亮時茂により落城させられたが、永禄7年(1564)第二次国府台合戦後、原胤貞は臼井城・生実城に復帰した。翌年、里見勢(正木時茂)が、原胤栄を曾我(蘇我)野原に破り、上杉勢は臼井城を攻撃した。元龜2年(1571)には生実城が里見方(正木時茂)の手に落ち、原胤貞は、一時、臼井城に居城している。天正18年(1590)の小田原城落城以後、当地域の城館跡の多くはその機能を閉じた。城山城跡を含む当地域は、上総と下総の境に近く、さらに東金街道も通るという重要な地点であるため、戦国期には千葉・原氏を含めた北条方、里見方、武田方が錯綜して領土紛争が継続され、在地領主の帰属については不明な点が多い。小弓・臼井原氏の城山城に関係するものと考えられるのは、享禄元年(1528)と天文19年(1550)銘の本庄伊豆守胤村寄進「千葉妙見縁起絵巻」二幅および、天正2年(1574)3月25日付で「奉寄進下総国臼井庄本城妙見堂金灯籠者也 原式部大夫平胤栄敬白」と記された釣燈籠²⁰⁾が栄福寺に伝来していることである。

ところで、当地域を含めた現千葉市域の中世城館跡の分布は、都川、村田川の本支流の台地突出部に数多くみられ、多くは急斜面の右岸に存在する。都川本流には、下流から加曾利館跡・多辺田城跡・ハガ館跡、支川都川右岸には、下流から城の腰城跡・城山城跡・栄福寺館跡・立堀城跡・東光院館跡・平山城跡、左岸に月の木砦跡・へたの台砦跡が存在する。左岸のものは比較的小規模で砦という名称が付されているが、緩斜面に大規模かつ堅固な城館跡の築城が難しかった結果により後世そう呼ばしめたものであり、他の城・館同様、その名と機能とは一致するとはいえないであろう。

これらの築城及び、改修に関わる画期を推測すれば、①それぞれの地域の開発領主による独自の築城、②馬加系千葉氏が平山城に居た¹⁷⁾時の防衛ラインとしての支城の段階、③馬加系千葉氏が佐倉に移動(15世紀後半)の後、小弓城や里見氏に対する防衛ラインとしての支城段階、④或いは、原氏本宗家の臼井城・生実城の連絡・防衛としての支城段階等があげられ、それぞれの場合で改修がなされたものと考えられる。

注1) 『千葉市城之歴史跡・西屋敷遺跡』(財)千葉県文化財センター 1979

(2), (3), (4), 00 『千葉市史』史料編 2 近世 1976 所収

(5) 「上総大椎城の歴史的意義」『千葉氏研究の諸問題』千葉県郷土史連絡協議会編 1977

(6) 橋口定司「中世居館の再検討」『東京考古』5 1987 では、発掘調査例から、堀・土塁を持つ方形居館の出現を中世後期に、斉藤慎一「戦国武将の城と縄張り」『戦乱の日本史』9巻 第一法規 1985 では、文献史料から在地領主層が恒常的に城郭を構える時期を15世紀に、それぞれ捉えている。

(7) 「千葉寛録」江戸中期 『改訂房総叢書』所収

(8) 「千葉縣千葉郡誌」千葉県教育会 1926

(9) 『日本城郭体系』巻6 1980

01 注5)及び「千字集抄」『改訂房総叢書』所収

02, 03 「千字集抄」

03, 06 「千葉縣史料」金石文1

04 「市川市史」5

07 注0)及び「七仏薬師如来由来記」『妙見実禄千字記』『改訂房総叢書』所収

参考文献 『千葉市史』史料編 1 原始・古代・中世 1976 遠山成一・外山信司「岩富原氏の研究」『房総史学』26 1986

3. 城山城の構造 (fig. II-4, 5)

城山城跡の地域は、大宮集落の台地から仁戸名側に突出した逆T字形をなす部分であり、その縄張り (fig. II-5) は大きく2つに分けられる。1つは台地と連結する広い郭 (I・II郭) およびその周囲の腰曲輪群であり、もう一つはI郭とは大堀切 (B) によって分断された台地縁辺部とそこから北西から南東に伸びる尾根を数本の堀切によって区画された直線的な連郭部分 (III~VIII郭) およびその周囲の腰曲輪群である。標高は、I郭南端、III郭側の土塁上が約33mと最も高く、I・II郭は32m前後、III・IV・V郭が約31m、VI郭が29.5m、VII郭が27m程、VIII郭が約20mである。

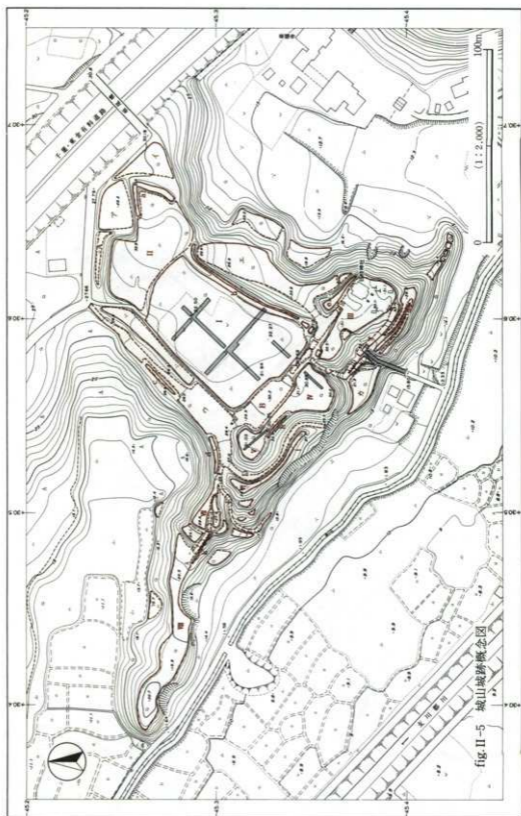
I郭

本城跡の郭の中で、最大の面積と標高を有し、主郭と考えられる。形状は北東側に比べ南西側 (連郭部方向) の辺がやや長い台形を呈し、III・IV郭側は約5m突出する。長軸約80m、短軸約40m~60mである。ほぼ平坦であるが、北西側と南東側の縁辺部は一段低くなっている。発掘調査によって地山を整形して段を造成していることが判明した。また、南東側のさらに縁には比高0.5mの土塁 (b) が残っており、I郭南端の土塁に連続する。周辺との比高は、II郭から約1m、北西側と南東側の両曲輪郭から約3m、大堀切 (B) の底から約2mである。

II郭とその周辺

I郭の北東に隣接し、台地との基部にあたり、不整形を呈する。北部は方形に、北東部は鋭





角をなして突出し、その接点でほぼ直角に折れる。前者の下には比高約3m、長さ約30m、堀底幅2～3mの堀(A)が存在する。堀底は現在湿地であり、水堀であった可能性がある。後者はその縁に沿って郭からの比高約0.5mの土塁(a)をもつ。鋭角突出部の東側には三角形の平場(イ)が、北側には不整形の平場(ア)が存在する。土塁からの比高はそれぞれ約2m、約2.5mである。その北は民家および千葉東金有料道路の造成によって改変された可能性もあるが、台地側に対する周的な防備施設からこの地区が当城の城域の北端部であると考えられる。

腰曲輪(ウ)

腰曲輪(ウ)はI・II郭の北西側に幅約15m、V郭の北側に幅約10m、VI郭の北側に幅約4mで巡り、台地基部と北西に伸びる尾根方向(VII・VIII郭)を結ぶ。腰曲輪(ウ)とI・II郭の中間に幅約5mの平場となっている。また、腰曲輪(ウ)の谷側縁辺部には約28m、高さ1～1.5mの土塁(c)と高さ約0.5mの土塁(d)がある。

腰曲輪(エ)とその周辺

腰曲輪(エ)はI郭の南東、III郭の北西側幅7m～18mで巡り、中心部が低く、北東側と南西側が高い。北にII郭、空堀Bを経てIII郭方面に通じている。これによって、南に開ける泉福寺側の谷の斜面を削平しながらも、その傾斜を有効に活用していることがわかる。さらに泉福寺側の斜面には2箇所平場が存在する。

III郭とその周辺

III郭は北西側が南東側に比べ短い不整形を呈する。東半分は現在日枝神社の境内であり、社殿とその参道を囲む微地形は神社境内の造成によるものと考えられる。境内北側には、土塁(e)が腰曲輪(エ)側からの敵を遮蔽するように造られ、I郭の南西端部、腰曲輪(エ)との位置関係によって、堀は逆T字形をなし、腰曲輪(エ)さらにはII郭方向への虎口を形成する。また、III郭の南西下には幅約8mの腰曲輪(オ)が造られ、その縁辺部には高さ約0.5mの土塁(f)とその内側に浅い堀が存在する。その内側平坦部は神社の参道として機能している。水田面からこの腰曲輪(キ)に向けて神社の石段が造られている。石段の西側には、平場(カ)・土塁(g)・竪堀(C)が存在している。石段が急傾斜直登であることから、土塁(f)と(g)は本来連続していたものと考えられる。また、南東に伸びる細尾根上には幾つかの平場と堀切が存在する。

IV・V郭

IV・V郭は、I郭とは堀切(B)、III郭とは堀切(B)および竪堀(C)と土橋を挟んで造られ、不整形のIV郭とV郭とは幅約5mの土橋状の連結部によって繋がる。IV郭はI郭側と南側に、V郭はI郭側と北西側に突出している。堀切(B)とこれら郭との比高は約0.3mしかないが、ここには発掘調査によって相当の土量が埋没していることが判明した。なお、土橋

状連結部の斜面側には高さ約0.3mの土塁（h）が長さ約20m存在する。

VI郭とその周辺

VI郭は東西に長い三角形を呈する小さな郭である。V郭とは堀切（D）によって隔絶されている。この堀切の比高はV郭とは約5m、VI郭とは約1.8mである。なお、堀底はIV・V郭の下にまで回り込んで腰曲輪を形成し、VI郭の南端は堀切に沿って下ってこの腰曲輪の縁辺に土塁を造りだしている。また、VI郭の西側斜面には3段の小規模な平場が存在する。

VII郭とその周辺

VII郭も三角形を呈する郭である。VI郭との間には堅堀（E）が存在し、その先端はV郭から西へ伸びる尾根を回り込む。郭の北側は腰曲輪（ウ）から連続し、南半分は比高約0.5mの土塁（j）である。中心部分からは、堅堀状の通路（F）がVIII郭へ伸び、通路の斜面側には比高約0.5mの土塁（k）が造られており、一つ虎口（大手か）を形成している。なお、VIII郭側に1段、南側に2段の小規模な平場が存在する。

VIII郭とその周辺

VIII郭の西より尾根先端まではほとんど自然地形と考えられる平坦面が続く。しかし、VII郭西側に存在する虎口と、尾根の両脇に幾つかの平場が造成されていることを考えると一つの郭として考えたい。

小結

以上、各遺構毎にその概要を記してきたが、全体を通して若干まとめてみたい。まず、主要部へのルートは、台地基部・西方尾根筋・東方尾根筋の3方向であるが、台地基部については明確な虎口としての施設がなく、千葉東金有料道路他の造成によって滅失した可能性がある。また、堀・土塁の位置・向き等から南側の平野部及び緩傾斜である西方尾根筋に対する防衛意識が強く、各郭の優先順位はVIII・VII・VI・V・IV・III・II・I郭となり、西方尾根筋が大手の可能性が高い。しかし、I郭は平坦かつ広大であるが、主郭として比高以外にその優位性に乏しいことから、発掘調査で確認された縁辺部の削り取り、土塁以外にも内側を仕切るなんらかの施設の存在が想像される。最後に遺構からみた本城跡の年代であるが、各郭間の堀が堅堀状に腰曲輪に連続すること、周到な土塁配置等からその最終使用段階を16世紀後半まで下るものと考えたい。

4. 発掘調査

(1) 調査方法と調査経過（fig. II-8）

発掘調査に先立って、伐採を実施し、調査区を設定した。調査区は、本城跡で最も広い部分であるI郭を中心に設定した。台地の長軸に沿って、Aトレンチ、これに直交するようにB、Cトレンチ、I郭とIV郭の地形的関係及びその間にある空堀の遺存状況を確認するためにAト

レンチに平行してD～Fトレンチ,さらにV郭の遺存状況を確認するためにGトレンチを設定した。Aトレンチの主軸方位はN-43°-Eとし,他は基本的に90°振った。Gトレンチは地形に沿って設定した。また,Aトレンチを調査中に検出した掘立柱建物跡の内容を把握するために,A,Cトレンチの交差部を拡張した。

調査面積は,Aトレンチ109㎡,Bトレンチ39㎡,Cトレンチ94.5㎡,Dトレンチ25.5㎡,Eトレンチ4㎡,Fトレンチ13㎡,Gトレンチ15㎡であり,総計300㎡である。

(2) 調査の概要

遺構(付図3)

I郭平坦部(A～Dトレンチ)

I郭は本城の主郭と考えられるので,重点的にトレンチを設定した。その結果,I郭の地山はほぼ平坦な地形を呈していること,耕作によって中世以降の生活面が削平されていることが確認された。また,遺構は漸移層では,明瞭に確認できず,ローム面において確認されたものが多かった。

a, 竪穴住居跡 Aトレンチの中央部からやや北よりのところから竪穴住居跡と考えられる落込みを7基検出した。B及びCトレンチにおいても同様の落込みを11基検出した。Aトレンチ南半分は柱穴列の粘土確認面(旧表土と考えられる黒色土)で止めた為,その下にまだ多



fig. II-6 調査風景



fig. II-7 調査風景

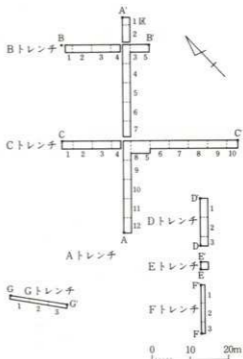


fig. II-8 トレンチ配置図

くの遺構が存在することが考えられる。これらの時期については、円形、隅丸方形、方形の住居形態及び遺物の出土状況から、縄文～平安時代に至るものと考えられる。

- b, 掘立柱建物跡 (fig. II-9) AトレンチとCトレンチの交差部付近から南にかけて、掘立柱建物跡が検出された。これは柱間が2間×3間と推定されるもの2棟、1間×1間と推定されるもの1棟であった。これらの柱穴は円形の掘り方を呈し、ローム、黒色土、褐色土を敷き固めて基礎として、上面に粘土を厚さ5～10cmで覆ったものである。この粘土には柱痕と考えられる落込みが認められた。根の部分であろう。なお、掘り方は径55～90cm、深さ20～30cm、根の径は約10～15cmを測る。平均すると、掘り方は径70cm、深さ27.5cmであり、根の径は約14cmである。また、この方位はAトレンチに沿って、SB01がN-44°-E、SB02がN-47°-E、SB03がN-44°-Eである。これらの建物跡は掘り方内の出土遺物から、10世紀に比定されよう。このように掘り方に粘土を混入したうえ、粘土敷の基礎は稀少であり、竪穴住居跡を一般的としていた当時においては、通常の建物でなく、公的あるいは寺跡など特殊な遺構であったと考えられるが、類例は見られない。
- c, 土坑 A～Dトレンチから21基の落込みが検出されたが、これらの性格は不明である。本遺跡が縄文から弥生時代、平安時代に至る集落が営まれたこと、また城跡であることから、これらに伴う遺構であると考えられる。
- d, 地山整形面 (fig. II-10) B及びCトレンチの西端、Cトレンチの東端に同様な覆土をもつ落込みを確認した。Bトレンチにサブトレンチを入れた結果、ローム面から約50cm下に、幅約50cmの段があり、さらにそこから急斜面を造成していることが確認された。郭の斜面を階段状にして防御機能を高めたものと考えられる。I郭東端の土塁はこの後の構築であろう。

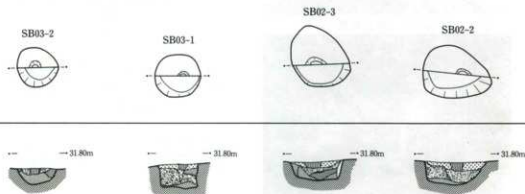


fig. II-9 柱穴列平面図,

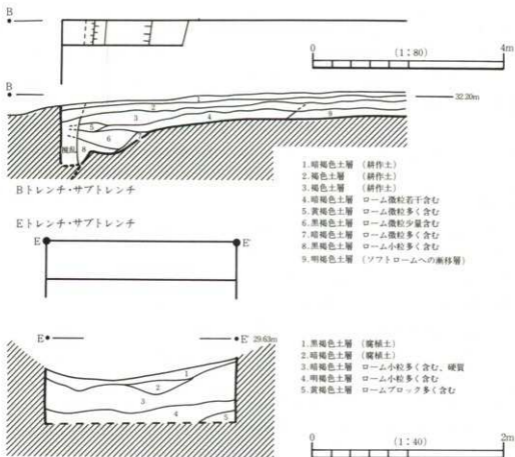
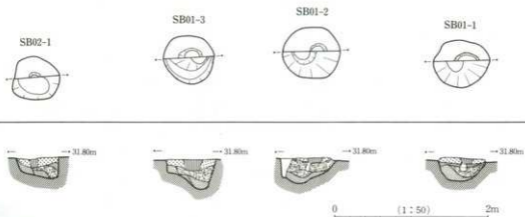


fig-II-10 サブトレンチ平面図・断面図



断面図

空堀 (Eトレンチ) (fig. II-10)

掘底表土直下で硬化面が検出されたが、サブトレンチを入れて約50cm掘り下げた。そこからボーリング棒を差し込んだ結果、さらに1m以上深いことが確認された。

IV・V郭 (F・Gトレンチ)

調査の結果、表土直下からローム層が認められ、地山整形を加えられていることが判明した。特に、遺構は検出されなかった。遺物としては、中世の常滑産と考えられる甕の底部分が1点出土したが、時期は不明である。

遺物

I郭は畑耕作によって、表土下50cmまで攪乱が及び、小片が多かったが、本城跡の使用あるいは構築時期に関連する遺物も若干ではあるが出土した。

(1) 土器

縄文土器 (fig. II-11:1~4) 縄文土器としては、中期加曾利E式が量的に多い。1 (Cトレンチ3区)は深鉢の胴下半部であろう。燃糸文が施されている。早期稻荷台式に比定されよう。2 (Bトレンチ3区)は深鉢の口縁部である。隆帯による区画文に沿って押引文が施されている。中期阿玉台Ib式に比定されよう。3 (Aトレンチ6区)は深鉢の胴部であろう。磨消縄文、懸垂文が認められる。中期加曾利EⅡ式に含まれると考えられる。4 (Aトレンチ6区)は深鉢の口縁部である。口縁に沿って連続刺突文が施されている。中期加曾利EⅢ式に比定される。

弥生土器 (fig. II-11:5) 5 (Aトレンチ4区)は壺である。中期後半宮ノ台式に比定される。頸部上半が欠損している。現器高13.8cm、胴部最大径12cm、底径5.6cmを測る。胴下半部に刷毛目痕が残る。胴部に数箇所朽痕が認められる。明褐色 (7.5YR5/8)。

土師器 (fig. II-11:6~9) 6は古墳時代初頭五領式、7~9は平安時代 (10世紀前半から中葉)と推定される。7、9は柱穴 (SB02-3)の掘り方の覆土から一括出土したものである。9は焼土上に伏せられた状態で出土した。意識的に基礎の上に伏せて焼いたものと推定され、掘立柱建物構築に関わる儀礼的意味を持つものと考えられる。

a. 高坏 6 (Aトレンチ4区)は脚部である。外面に縦位のへら磨きを施し、赤彩してある。胎土に長石、石英の微粒子を多く含む。にぶい赤褐色 (7.5YR5/4)。

b. 坏 7 (SB02-3)は底部であり、現器高1.5cm、底径5.4cm。9 (SB02-3)は器高4.2cm、口径12.4cm、底径6.4cm。7、9ともロクロ成形である。7は回転糸切り、9は外面下半部手持ち篋削り、底部篋削りである。いずれも長石、石英、黒色微粒子を多く含む。9は柱穴の焼土上から出土し、二次焼成を受けていて、やや脆い。7は明赤褐色 (2.5YR5/8)、9はにぶい褐色 (7.5YR5/4)、暗褐色 (7.5YR3/3)。

c. 高台付碗 8 (Aトレンチ6区)は推定底部5.0cmの内黒土器である。ロクロ成形。内面

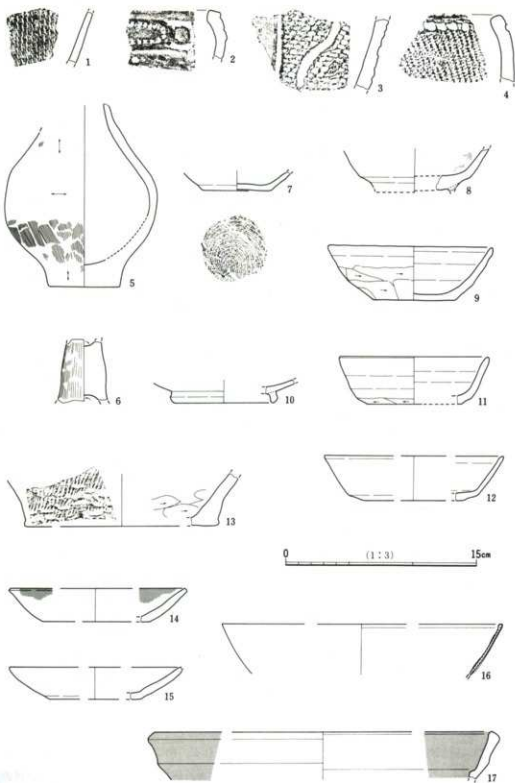


fig.II-11 出土遺物実測図(1)

へら磨き調整。長石、石英、黒色微粒子を多く含む。内面は黒色(10YR7/1)、外面は浅黄橙色(10.5YR8/6)。

須恵器 (fig. II-11:10~12)

a, 転用硯 10(Aトレンチ7区)は高台付坏の転用硯であり、9世紀後半に比定される。底径6.4cm。ロクロ成形。長石微粒子を少量含む。灰白色(10YR7/1)。

b, 坏 11(Bトレンチ5区)は土気産で8世紀第四半期に比定される。口径11.5cm、底径7.5cm。12(Gトレンチ2区)は8世紀前半に比定される。器高3.5cm、口径14.0cm。いずれもロクロ成形、底部寛削りである。11は黒褐色(10YR2/2)、12は灰白色(2.5YR7/1)。

かわらけ (fig. II-11:14,15) ほぼ全域から出土しているが、他はすべて小振りと推定されるものの小破片であり、実測が不可能であった。14(Cトレンチ3区)、15(Cトレンチ6区)とも16世紀後半に比定されよう。14は器高2.6cm、口径14.0cm、底径8.4cm。口縁部に油煙が付着している。浅黄橙色(10YR8/4)。にぶい黄橙色(10YR7/4)。15は器高2.5cm、口径13.2cm、底径7.1cm。いずれも、底径に比べ口径が大きく、ロクロ成形(14は右回転、回転糸切り、石英微粒子、黒色微粒子、海綿骨針を若干含む。14は石英が少ない。

(2) 陶磁器

甕 (fig. II-11:13) 13(Fトレンチ)は常滑。推定底径15.4cmの甕である。内面はへら調整、外面に叩き目調整が施されている。内面に自然釉が付着する。胎土は灰褐色(5YR6/2)で白色微粒子を若干含む。内面灰黄褐色(10YR6/2)、外面灰褐色(10YR5/1)。時期不明。

鉢 (fig. II-11:17, fig. II-12:18) 17(Cトレンチ5区)は瀬戸・美濃系。近世。内外面に鉄釉が付き、暗褐色(5YR3/6)。胎土は淡黄色(2.5Y8/3)で黒色微粒子を若干含む。18(Bトレンチ2区)は瀬戸・美濃系。胴部である。灰赤色(2.5YR5/2)で胎土は淡黄色(2.5Y8/3)。

小皿 (fig. II-12:19,20) 19(Aトレンチ9区)は瀬戸・美濃系。15世紀の所産と考えられる。推定口径5.8cm。口縁部内・外面に灰釉が残る。オリーブ灰色(10Y6/2)。内・外面は灰黄色(2.5Y7/2)。20(Aトレンチ9区)は瀬戸・美濃系灰釉。口縁の一部で。推定口径16.0cm、口縁下1cmに稜を有する。内・外面に浅黄色(2.5Y7/4)の灰釉が認められる。胎土は浅黄色(2.5Y8/3)。

天目茶碗 (fig. II-12:21) 21(Bトレンチ3区)は瀬戸・美濃系の天目茶碗。内面全体及び外面体部下部まで鉄釉が施されている。黒褐色(5YR2/1)。胎土は浅黄色(2.5Y7/4)で黒色微粒子を少量含む。

青磁 (fig. II-12:22~24) 22(Bトレンチ3区)は外面に蓮弁文をもつ。底部の一部。高台欠損。底部外面中央部を中心にかきとり痕が認められる。釉はオリーブ灰色(10Y6/2)。胎土は淡黄色(2.5Y8/3)。23(Aトレンチ2区)はへら書きの草花文が描かれている。釉は浅黄色(7.5Y7/3)で貫入多く、薄くて均一。胎土は灰白色(2.5Y8/2)。24(Bトレンチ2区)は

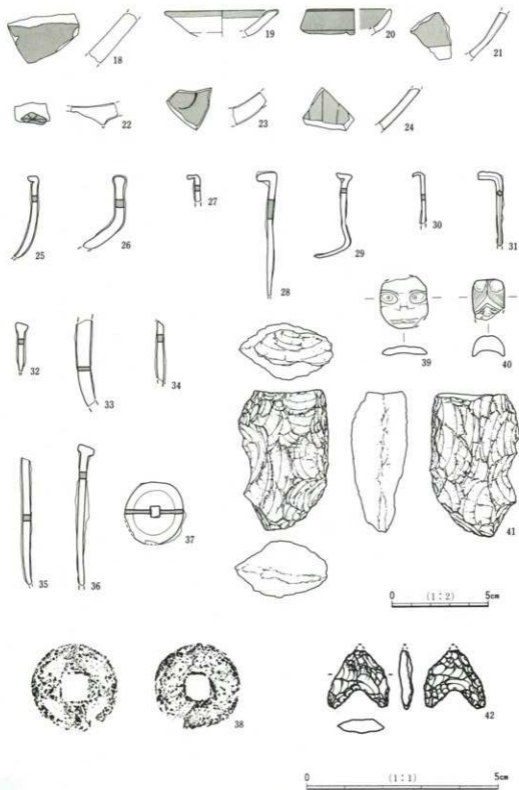


fig.II-12 出土遺物実測図(2)

内面に蓮弁文の稜線が認められる。軸は浅黄色(7.5Y7/3)で貫入多く、薄くて均一。胎土は灰白色(2.5Y7/1)。これらは14～15世紀の所産と考えられるが、生産地は不明である。

(4) 金属製品

鉄錠 (fig. II-12:16) 16 (Aトレンチ10区)は口径21.6cm, 重量35.6g。口縁部は内側に折り返されている。

鉄釘 (fig. II-12:25~36) 鉄釘は下表のとおり12点出土した。なお、ここでいう「頭つくり出し」は上端部を平らに叩いた後、折り曲げたものと推定される。Aトレンチ出土のものは、柱穴確認面の黒色土層上にまとまって出土しており、それらに関連性を求めたい。

番号	長さmm	断面mm	重さg	形態	出土地点
25	(42.0)	3.5×3.5	3.8	頭つくり出し類	Aトレンチ2区
26	(46.0)	4.5×4.5	4.9	頭巻類	Aトレンチ2区
27	(14.0)	3.0×3.0	0.5	頭つくり出し類	Aトレンチ8区
28	(64.0)	9.0×3.0	10.4	平釘の頭つくり出し類	Aトレンチ8区
29	(57.0)	2.5×3.0	2.3	頭つくり出し類	Aトレンチ8区
30	(22.0)	3.0×2.0	1.7	頭つくり出し類	Aトレンチ8区
31	(45.0)	2.5×2.5	1.9	折れ釘類	Aトレンチ9区
32	(26.0)	3.0×3.0	2.0	頭巻類	Bトレンチ3区
33	(44.0)	7.0×2.0	3.4	平釘類	Cトレンチ3区
34	(33.0)	3.5×3.0	2.6	不明	Cトレンチ5区
35	(61.0)	4.0×3.0	4.8	不明	Cトレンチ6区
36	(72.5)	4.0×4.0	5.9	頭巻類	Cトレンチ8区

Tab. II-1 鉄釘計測表

不明鉄製品 (fig. II-12:37) Dトレンチ出土。鉄銭か。外縁外径31.0mm, 外縁内径22.5mm, 内郭内径6.0mm, 外縁厚2.5mm, 文字面厚2.0mm。重さは7.8g。

古銭 (fig. II-12:38) 38は「元祐通寶」。書体は篆書。初鑄年は北宗・元祐元年(1086)である。計測値は重量2.02g, 外縁外径22.69mm, 内郭外径18.03mm, 外縁内径7.15mm, 内郭内径5.95mm, 外縁厚1.17mm, 文字面厚0.82mm。なお、計測法は東金城跡 tab. I-2を参照のこと。

(5) 土製品 (fig. II-10, 39, 40)

いずれも、泥めんこである。39 (Cトレンチ2区)は獅子面であり、縦2.7cm, 横2.5cm, 厚さ4～5mm。浅黄褐色(7.5YR8/6)。39 (Dトレンチ4区)は般若面であり、下端を欠損している。現縦2.1cm, 横1.6cm, 厚さ7mm。橙色(5YR7/6)。

(6) 石製品 (fig. II-12:41, 42)

41 (Aトレンチ5区)は打製石斧である。上部は欠損後、再加工を加えている。長さ7.4cm, 最大幅4.7cm, 最大厚2.9cm。42 (Aトレンチ4区)は黒曜石製の石鏃である。上端が欠損している。現長15.0mm, 最大幅16.0mm, 最大厚3.5mm, 挟入5.0mm。縄文時代に属する。

参考文献 金箱文夫「近世の釘」『物質文化』43 1984

5. 結 語

今回の調査は確認調査であり、発掘面積も約300㎡と制約されており、本城跡の内容を十分に知り得たものとは言えないが、測量調査及び発掘調査によって従来知られていなかった点も確認することができた。以下、その結果をまとめて結語としたい。

1. 測量調査の結果

- (1)規模及び立地 舌状台地先端部に占地し、東西300m、南北200mの規模を有する。
- (2)施設 本城は8郭からなる。本城の主郭はやや長い台形を呈し、周囲に腰曲輪、空堀を配する。これを中心として北東にII郭、南にIII郭～VIII郭がある。また、堀切や土塁の向き・配置・VIII郭の虎口等から、各部の防御意識の優位順はVIII・VII…II・Iであり、本城の大手は西尾根であると考えることができる。
- (3)機能及び時期 本城は、小規模であり、堀・土塁に折垂は見られないものの、各郭間の堀が堅堀状に腰曲輪に連続すること、周到な土塁配置等から、戦国時代後半には支城クラスとしてその機能を閉じたものと考えられる。

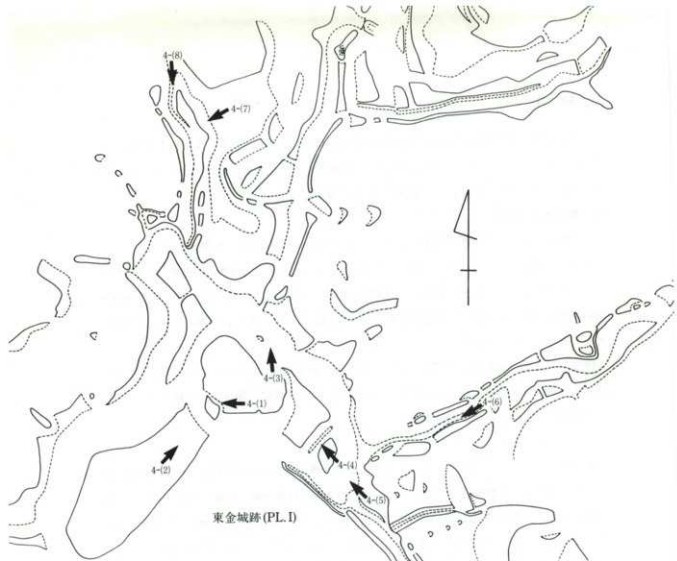
2. 発掘調査の結果

A～Dトレンチでは、I郭の中央から北側にかけて縄文時代から平安時代の竪穴住居跡と考えられる落込みを多数確認できた。また、南部から掘立柱建物跡（柱間 2間×3間 2棟、1間×1間 1棟）を検出した。掘り方は円形を呈し、ローム、黒色土、褐色土を固めて基礎としたものであり、上面に粘土を厚さ5～10cm覆っている。粘土の一部に柱根と考えられるわずかな落込みも認められる。掘り方内の遺物から10世紀に比定される。このような掘立柱建物跡は通常の集落のみならず、官衙・寺院でも管見の限り知らないものである。中世以降に関しては耕作により生活面は破壊されていたが、I郭の東西両端部に地山を段状に削り取った跡が確認された。Eトレンチは空堀（B）の深さが現堀底地表面よりさらに1.5m以上深いことを、また、F、Gトレンチでは、IV、V郭にハードローム層上面まで地山整形されていることを確認できた。なお、中世の遺物は14～16世紀のものが出土している。

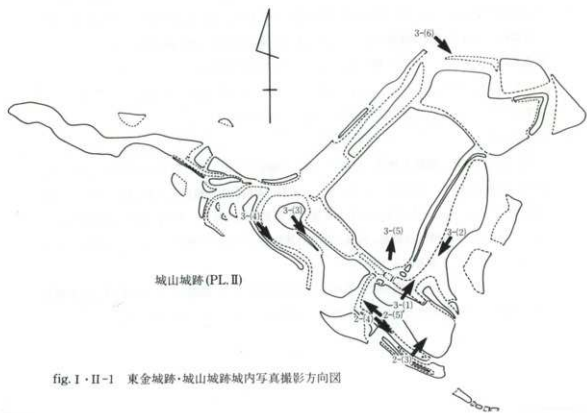
3. まとめ

今回の調査は城山城跡を測量と発掘の二面から検討を加え、その結果、小規模な山城ながら充実した構造を持ち、残存状況の良いこと、I郭の東西斜面の整形、空堀（B）の深さが現堀底地表面から1.5mにも及ぶものである等様々な事実を知り得た。また、城跡とは直接関係しないが、縄文～平安時代の集落、特異な掘立柱建物跡の存在等を確認できた。当地域の当該時期の歴史を知る上で意義あるものといえよう。

本城跡に関しては、その構造など個別的問題ばかりでなく、他城との、また村落との有機的関係等研究すべき点はまだ多い。城山城跡の研究はその緒についたばかりである。



東金城跡 (PL. I)



城山城跡 (PL. II)

fig. I · II-1 東金城跡・城山城跡城内写真撮影方向図

写 真 图 版

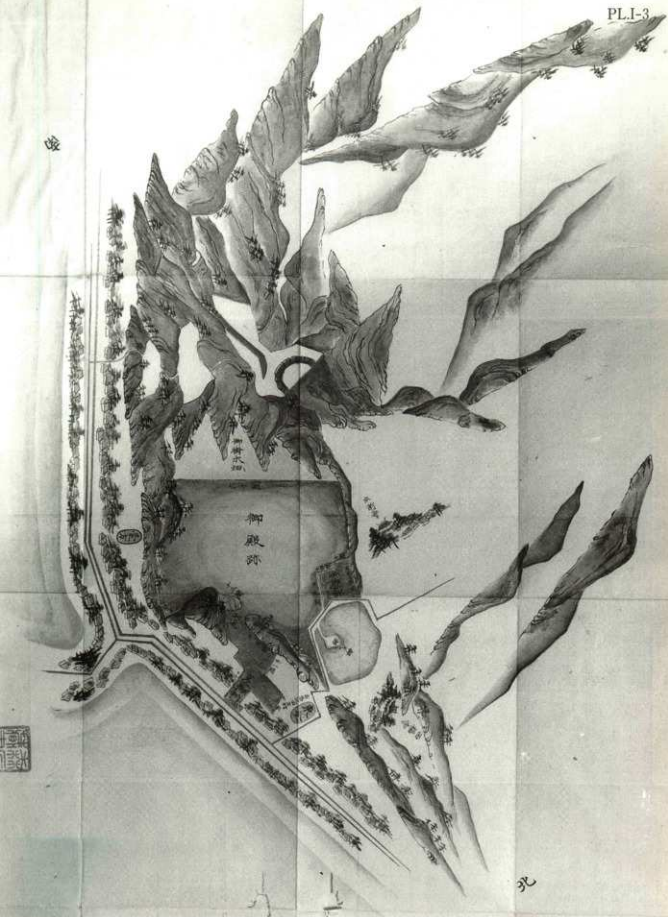




(1) 東金城跡遠景（南から）



(2) 東金城跡遠景（北東から）



『上德國山邊郡 東金古城之圖・城及御殿跡』



(1) I郭上の壇



(2) II郭からI郭をのぞむ



(3) I郭斜面から腰曲輪をのぞむ



(4) III・IV郭間の堀



(5) IV郭手前



(6) 尾根(B)の平地



(7) 尾根(D)の平地



(8) 尾根(D)の豎堀



(1) Aトレンチ北区



(2) Aトレンチ南区



(1) Bトレンチ



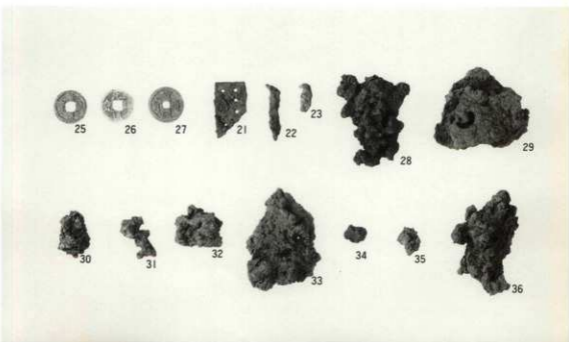
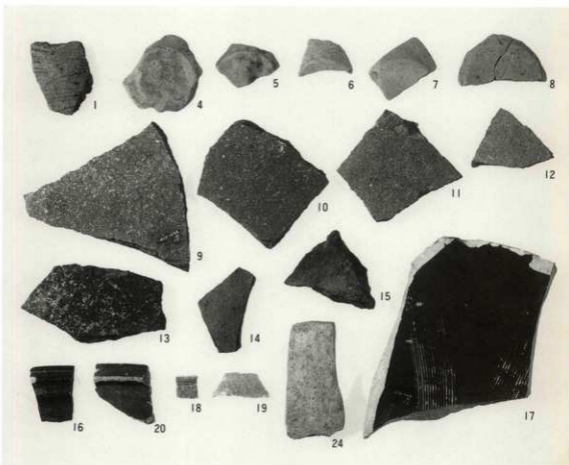
(2) II郭上から平野部をのぞむ



2



3







(1) 城山城跡遠景(南から)



(2) 城山城跡遠景(北東から)



(3) 日枝神社正面



(4) III郭南の腰曲輪



(5) III・IV郭間の堀



(1) III郭から腰曲輪(エ)方向をのぞむ



(2) 腰曲輪(エ)からIII郭方向をのぞむ



(3) V郭からIV郭方向をのぞむ



(4) V郭下の腰曲輪



(5) I郭南端から北方向をのぞむ



(6) 空堀(A)



(7) 坂尾山栄福寺正面



(8) 栄福寺境内五輪塔・宝篋印塔一部



(1) Aトレンチ1・2区



(2) Aトレンチ3～7区



(3) Aトレンチ8～12区

(1) SB01-3



(3) Cトレンチ拡張部



(2) SB02-3



(4) Bトレンチ1~4区



(5) Bトレンチ・サブトレンチ





(1) Bトレンチ4・5区



(2) Cトレンチ1~4区



(3) Cトレンチ5~10区



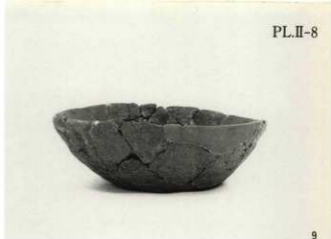
(1) E・Fトレンチ



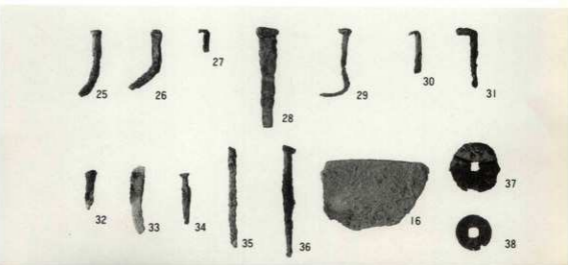
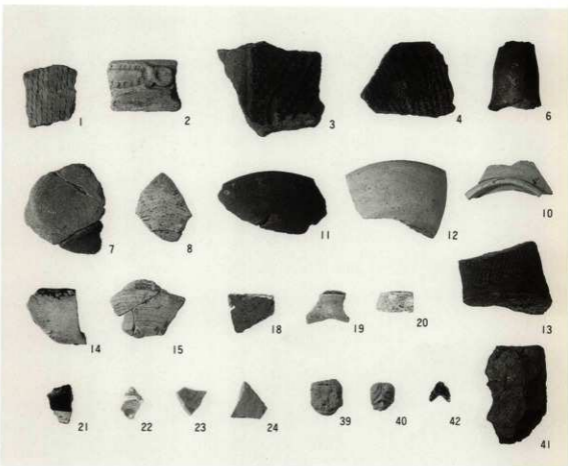
(2) Gトレンチ



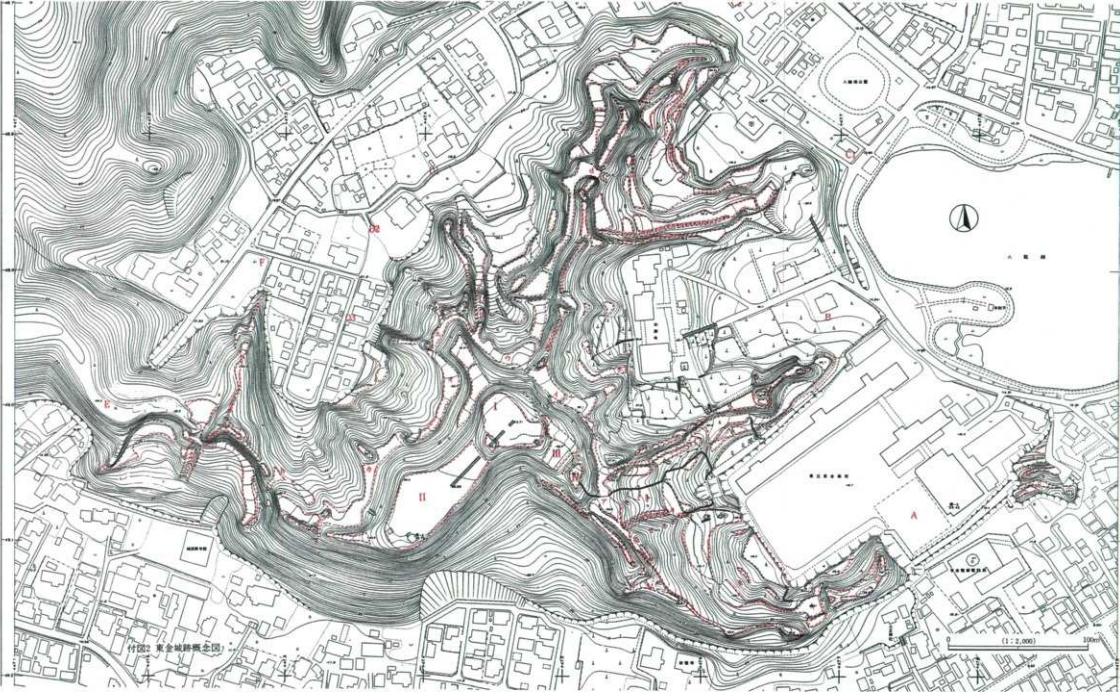
5



9

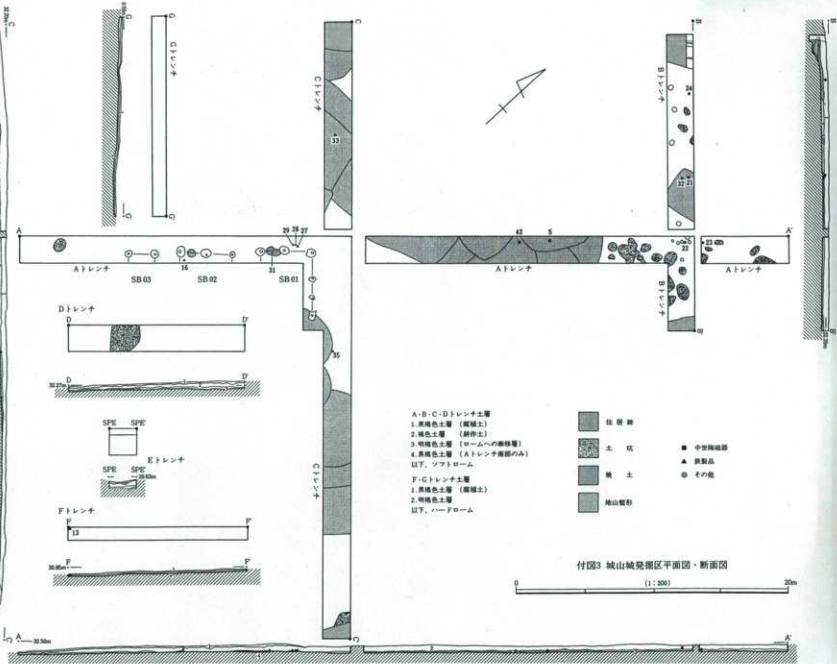






竹園 黃金城跡概念全圖

1:2,000



- A-B-C-Dトレンチ土層
 1. 赤褐色土層 (腐植土)
 2. 褐色土層 (砂状土)
 3. 明褐色土層 (ロームへの腐植層)
 4. 黒褐色土層 (Aトレンチ層部のみ)
 以下、ソフトローム
- F-Gトレンチ土層
 1. 黒褐色土層 (腐植土)
 2. 明褐色土層
 以下、ハードローム

- 住居跡
- 土坑
- 焼土
- 焼山瓦影
- 中世陶磁器
- ▲ 鉄製品
- その他

付図3 城山城発掘区平面図・断面図



千葉県文化財センター調査報告第166集
千葉県中近世城跡研究調査報告書 第9集
—東金城跡・城山城跡発掘調査報告—

平成元年3月31日発行

発 行 財団法人 千葉県文化財センター
千葉市葛城2丁目10番1号

印 刷 有限会社 正文社
千葉市都町2丁目5番5号

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て
増刷したものです。